

翻 訳

カスパル・マーゼ

ポピュラー・エンタテインメントをめぐる変遷*

— <大衆文化>から<ライブ社会>へ

河 野 眞 (訳)

【解題】 本稿はカスパル・マーゼの論考の翻訳である。はじめに書誌データを挙げる Kaspar Maase (Hamburg), *Spiel ohne Grenzen. Von der „Massenkultur“ zur „Erlebnisgesellschaft“*. *Wandel im Umgang mit populärer Unterhaltung*. In: Zsf Vkke 90. Jg. (1994), S.13-36.

マーゼは日本では未紹介と思われるが、現在、ドイツのテュービンゲン大学の経験的文化研究学科の教授である。経験的文化研究とは、日本の民俗学に当たるものの現代ドイツでの呼称の一つで、テュービンゲン大学が中心となっている。ドイツでは、民俗学にあたる分野名称 „Volkskunde“ が過去に問題をかかえた経緯があり、その清算の観点から1970年前後に幾つかの名称変更が進められた。ヨーロッパ・エスノロジー、ないしはそこにフォルクスクンデを併記するものもその一つで、マールブルク大学民俗学科がその早い事例であった。またベルリン（フムボルト）大学もその名称である。„Volkskunde“ の名称を挙げつつも、そこに経験的文化研究 (empirische Kulturwissenschaft) を同格とするのは、1960年前後から民俗学科を主宰したヘルマン・バウジンガーの改革を受けており、機関名称の変更が公式に確定したのは1971年であった。とまれ、その趣旨は、現代の文化分析としての学としてフォルクスクンデの刷新にあった。もっとも、マーゼは目下のポストからはバウジンガーの後継者の一人ながら、その学問形成の経緯は特に関係していない。そこで次に経歴である。

原テキストのタイトル: Kaspar Maase (Hamburg), *Spiel ohne Grenzen. Von der „Massenkultur“ zur „Erlebnisgesellschaft“*. *Wandel im Umgang mit populärer Unterhaltung*. In: Zsf Vkke 90. Jg. (1994), S.13-36. なおこれには英文の短いサマリーが付いているが、その英語の表記は次である。Kaspar Maase, *Game without Frontiers. From „Mass Culture“ to „Pleasure Society“: Changing Attitude to Popular Entertainment*. 従ってタイトルには幾つかのキーワードがもちいられているが、日本語訳にあたっては、メインタイトルは省き、また論者の英文とは異なる<ライブ社会>の語をもちいる。これについては、語注で解説した。

カスパー・マーゼは1946年にデュッセルドルフに生まれ、はじめミュンヘン大学でゲルマニスティク、美術史を学んだが、やがて社会学に関心を強めると共に、当時は東ドイツであったベルリン大学へ移り、そこで1971年に学位を得た。学位論文は「1955年以後のドイツ社会民主党の文化理解について」である (*Zu Kulturkonzeption und Kulturauffassung der SPD seit 1955*) である。東ドイツでの勉学を選んだことと言い、その学位論文のテーマと言い、当時の現実の状況との関わりが強いと言える。資質もそうであったのであろうが、学業を終えると出版界に入った。その後、研究職へのチャンスを得て、1980年から1994年までフランクフルトの「マルクス研究所」(Institut für Marxistische Studien und Forschung/IMSF in Frankfurt am Main) に勤務した。その間、1990年から94年まではハンブルクの「社会科学研究所」(Hamburger Institut für Sozialforschung) の補助研究員となった。またその時期に研究を進めて、1992年にブレーメン大学の文化研究科(社会学科に相当)に教授資格申請論文を提出した。1995年から2年間、チュービンゲン大学のルートヴィヒ・ウーラント研究所に客員として出講し、その後、1997年から2000年までベルリン大学ヨーロッパ・エスノロジー学科にも共同研究者として出講した。ちなみに1992年以来ベルリン大学のこの学科を主宰するのは、パウジンガーの学徒であったヴォルフガング・カシュバ(Wolfgang Kaschuba 1950年生)である。そして1998年からルートヴィヒ・ウーラント研究所の研究員となり、2000年にチュービンゲン員外教授となり、現在もその職にある。



カスパー・マーゼ

以上からも分かるが、研究者の通常の歩みに比べてマーゼはやや異色である。精神科学の分野では、一般社会と大学との人員交流にはなお伝統的な制約がある上に、マーゼには(少なくとも経歴からは)ややアウトサイダー的な側面も見える。1970年前後に東ドイツを勉学の地を選んだこと、西ドイツでもマルクス研究所の勤務が長かったこと、そしてブレーメン大学に教授資格を申請したことである。ブレーメン大学は1968/9年を頂点とする学生運動のなかで顕在化した大学のあり方の諸問題を批判的に解決する方向で新設された大学で、俗に言えば左寄りである。それゆえ昨今では、毎年、数誌が発表する大学の人気ランキングでも一般受けは今一つであるが、また批判精神に富んだ学生が集まるという傾向をも持っている。

以上からも分かるが、研究者の通常の歩みに比べてマーゼはやや異色である。精神科学の分野では、一般社会と大学との人員交流にはなお伝統的な制約がある上に、マーゼには(少なくとも経歴からは)ややアウトサイダー的な側面も見える。1970年前後に東ドイツを勉学の地を選んだこと、西ドイツでもマルクス研究所の勤務が長かったこと、そしてブレーメン大学に教授資格を申請したことである。ブレーメン大学は1968/9年を頂点とする学生運動のなかで顕在化した大学のあり方の諸問題を批判的に解決する方向で新設された大学で、俗に言えば左寄りである。それゆえ昨今では、毎年、数誌が発表する大学の人気ランキングでも一般受けは今一つであるが、また批判精神に富んだ学生が集まるという傾向をも持っている。

次に注目すべきは、そうした経歴をもつマーゼにチュービンゲン大学のルートヴィヒ・ウーラント研究所がポストを提供したことである。これには同研究所を長く主宰し、今も

影響力をもつヘルマン・パウジンガーの意向が反映している。パウジンガーは民俗学の刷新者として世界的に知られているが、一般によく見られるようないわゆる子飼いを後継者に選ぶとことを潔しとしないところがある。ルートヴィヒ・ウーラント研究所の現在の教授陣を見ると、ほぼ全員がパウジンガーのもとで長く学んだ経歴をもたない。他方でその直接の弟子たちが多くの大学でポストを得ており、おそらく学界で最も割合が高いであろう。しかし中心となる機関のルートヴィヒ・ウーラント研究所には絶えず新しい血と視点を導入しようとするのと、パウジンガーの業績が今日では学界の多数にとって基礎理論の性格をもつために、その指向した方向は揺るがないという実状もあるであろう。とまれ、次にマーゼの研究についてふれておきたい。

先に教授資格論文に触れたが、それはやがて刊行された。それがマーゼの最初の重要著作で、また学界でも特に注目されることになった『ブラーヴォ、アメリカ』である (Kaspar Maase, *BRAVO Amerika. Erkundungen zur Jugendkultur der Bundesrepublik in den fünfziger Jahren*. Hamburg 1992)。ドイツ人がこれを聞くと、字義そのものにとどまらない印象をもつはずである。と言うのは、『ブラーヴォ』とは、1956年に創刊され、今もドイツ語圏では最大の発行部数をほこるヤング向けの週刊誌のタイトルだからである。やや詳しく言えば、創刊から10年ほどで、その発行部数が180万部を記録し、今もそのタイトルの本体の雑誌が50万部を数える他、『ブラーヴォ・ガール』や『ブラーヴォ・スポーツ』や、最近ではネット配信誌を含めて12の関連誌を併せたヤング向けの一大雑誌グループである。と言って、マーゼの著作は、その雑誌の分析に終始したものではなく、そのヤング雑誌が刊行された時代である1950年代に焦点を併せて若者文化の形成とその社会的な意味合いを考察している。とりわけ、アメリカナイゼーションとグローバリゼーションを取り上げることによって、文化と言えは通常は伝統文化に接近させた理解がなされることに対して、動くものとしての文化という視点である。同時に、若者文化を単に進取とばかり捉えるのではなく、挑戦と妥協と屈服、解放と閉鎖という二極からもとり上げている。またそうした角度からの分析であるために、社会学の枠組で執筆されながら、社会学そのものというより、現代民俗学に近い性格を示している。またマーゼのその後の研究成果として注目すべきものには『果て無き娯楽：大衆文化の興隆』(Kaspar Maase, *Grenzloses Vergnügen. Der Aufstieg der Massenkultur 1850–1970*. Frankfurt a.M. 1997.) があり、19世紀半ばまで遡って民衆娯楽の展開を追っている。これからも窺えるように、社会学から出発しながらも、エンタテインメントに傾斜した民衆文化の専門家と言ってよいであろう。

それはマーゼのその後の研究テーマからうかがえる。特に注目すべきは2000年に刊行された『民衆文化の形成』(*Entwicklung der Volkskultur*) で、これは19世紀前半まで遡って、民衆文化の変遷を追っている。そこでもちいられる術語 <フォルクスクルトゥア>

(Volkskultur) は、〈民俗文化〉でもある。すなわち民俗学がその研究対象を包括的に指す場合の語でもある。これを見ると、マーゼの研究が、社会学から出発して、民俗学へ傾斜したことが著作の表題からも知ることができる。

*

本編の内容や意義については、これを紹介することになった私の動機を記すのが手っ取り早い。ドイツ民俗学の専門誌に毎度丹念に目を通しているわけではないが、ときどき興味をもって訳すことがある。専門誌の論文は一冊の書物を翻訳するのと違い、手軽に事情を伝えることができる。これまでも2001年のドイツ民俗学会誌の「ハロウィン特集」や、スイス民俗学会誌に1994年に発表された「ユーロ・ディズニー」論などを本誌で紹介した。もとより興味を覚えても実際に紹介にまでゆくのは僅かすぎない。そのなかで本篇は、1994年の発表から程遠くない時期に読み、それ以来気になっていた。あるいは時を追って気がかりになる度合いが増したと言ってもよい。

その第一は、本篇がもっていたある種の先見性である。本篇では話の枕に文藝批評の大御所ライヒ＝ラニツキの風変わりな活動が挙がっている。第二次世界大戦後のドイツの良心的な作家の結集である「グルッペ47」のメンバーでもあり、日本でもその面から紹介されてきた人物である。しかしここで取り上げられているのは、その大家がテレビのヴァラエティ番組を積極的に評価したというできごとである。しかもこの論文の14年後にライヒ＝ラニツキはテレビ文化賞を受賞し、そのお祝いとして当のヴァラエティ番組の司会者であったトーマス・ゴットシャルクと対談をおこなうまでになった。マーゼの予測は的中したことになる。これ自体はエピソード程度であるが、もう一つ重要なのは、本稿がゲハルト・シュルツェの『ライヴ社会論』(Gerhard Schulze, *Die Erlebnisgesellschaft*, 1992; 本文の注20)を刺激にして逸早く書かれたことである。正直に言えば私は本篇によってシュルツェ(生1944)の主著を知ったのであった。その後『ライヴ社会論』はドイツ社会学の代表的な論作と見られるようになっていった。とは言え日本ではそれはなお未紹介のようである。これを言うのは、



マーゼの本稿(1994年)で話の枕にもちいられた二人の組み合わせだったが、14年後(2008年11月11日)ライヒ＝ラニツキはテレビ文化への貢献のゆえにドイツ・テレビ賞を受け、引き続いてトーマス・ゴットシャルクとの全国放映の一時間の談話に臨んだ

それに照応する先行例にあたるフランスのピエール・ブルデュー (Pierre Bourdieu 1930-2002) の場合は主要著作がほとんど邦訳されているからで、情報における独仏の厚薄は不思議なほどである。それはともあれ、社会学の重要著作からの刺激をドイツ民俗学会の機関誌がとり上げたことに関心を強めたのである。それには、同じことが日本で起きるだろうかという疑問も寄り添っている。

第二は本篇の中身である。ブルデューの理論と同じく、シュルツェの場合も現代社会の階層や区分をあつかっている。それはイギリスのバジル・バーンステイン (Basil Bernstein 1924-2000) についても言い得よう。それらに注目して改めて周囲を見ると、社会のなかの区分の解明という問題意識をめぐって日本では異なった事情があるように思われる。日本でも社会的な区分や格差が現実には存するであろうが、それがどのようなものであるかが必ずしも正面から論じられないのではなかろうか。資本家とプロレタリアートの二元論は昨今本気で口にされることはなくなったが、現実に作用している区分の議論が活発であるとも見えない。私たちのあいだでは、ヨーロッパ諸国ほど社会的な差異が表面に出てはいないのかも知れないが、また社会区分を収入や生活水準の次元からさらに踏み込んで論じることにはタブー視のきらいがあることも関係していよう。しかしまたここでふれた英仏独の論者の理論によって現代の社会区分が一般的に説明できるのであろうかという疑念も起きる。日本の現実はそのらを適用しても説明がつかないほど微妙なのであろう。それはともあれ、社会区分が論じられるという事実、それが民俗学の専門誌上であることに興味を覚えたのである。

第三に、その論が当たっているというより、いかにもドイツ人らしいことが注目される。当初から興味を持つと共に幾らか違和感を覚えたのは、テレビの娯楽番組やある種のスポーツへの評価である。プロレスはその代表的なもので、それを楽しむのが特定の人々や集団に限られるという論は私たちには怪訝でもあり、また思いつかない視点でもあろう。ドイツでは、オリンピック種目ともなっているグレコローマン・スタイルなどではない娯楽興業としてのプロレスはあまり盛んではなかったとは言えるかもしれない。もっとも、



テレビ賞を受賞した批評界の大御所ライヒ＝ラニツキをトミー (トーマスの愛称) のバラエティ番組風に描いたカリカチュア 2008年 „B(R)UCHTEST“ : <書評 (ブック・テスト)> と空手の<試し割り>は一字違い



「ビーオの駅舎」(1978-82 ARD 放映)

ケルン＝フレッヒェン＝ブレンツラート鉄道の使われなくなった車庫をスタジオにアルフレート・ビーオレークがプロデュースと司会をつとめたトークショーとエンタテイメントから多くのテレビタレントが誕生した(本文p.116)

すでに1950年代後半から1960年前後にかけてアメリカのフレッド・ブラッシーなどと並んでカール・ゴッチというドイツ出身のレスラーがいたはずであるが、それは力道山と組になった記憶である。一般にははるかに下ってアントニオ猪木がヨーロッパ公演でローラン・ボックに痛打された〈シュトゥットガルトの惨劇〉(1978年)あたりがドイツ人プロレスラーの日本での報道の早い事例だったかも知れない。ドイツでプロレスがようやく定着に向かったのもその頃だったようである。これらのエピソードが取り上げられているわけではないが、人間の身体能力とエンタテイメントが結びついた極限的な一形態がドイツの知識人にはどう見えるのかが興味をそそるのであり、それをめぐる議論への違和感は文化の特徴が仄見える隙間でもある。そうした様々な意味で民俗学誌上のこの論文は面白かったのである。改めて振り返ると発表からかなり経過しているが、年数ほどには色褪せてはいない。

なお付言すると、文体にも興味を覚えたところがある。本稿は、韜晦というほどではないが、いくらか斜に構えた、個性的な文章である。こういう種類の表現を日本語になおすのは、これはこれで刺激的であった。

訳出にあたっては、マーゼ教授と、本稿原文の掲載誌の運営母体であるドイツ民俗学会の好意を得たことを付記する。

カスパル・マーゼ

ポピュラー・エンタテインメントをめぐる変遷

— <大衆文化> から <ライブ社会> へ

1992年5月4日、この日はドイツ連邦共和国の文化史の際立った日付けとなることであろう。トーマス・ゴットシャルク*が、文芸欄の教皇マルセル・ライヒ＝ラニツキ*によって列聖されたのである。神聖な儀式の舞台になったのは、『フランクフルト・アルゲマイネ新聞』(略称FAZ)の藝術欄だった。ドイツのポストモダンの拡張された大広間で、テレビ・タレントは将来 <ナータン*とファウスト*とハンス・アルベルス*とエスカミーリョ*にはさまれて奇跡>¹ を演じることになるだろう。

ライヒ＝ラニツキの大仰な言動こそ、ドイツ連邦共和国の文化空間を深部で切り替える展開の到達点であった。3世紀前も遡れば <大衆文化> はなお教養人士とその讃仰者たちの忌避感に見舞われていた、その同じものが、今日 <ライブ社会>* では尊敬される場所を占めている。娯楽の王国に槍を突き立てたのは、視聴率の戦いにおけるテレビのボスではなかった。市民的文化価値という財宝庫の番人が、ハンブルクのグミボールCM出身の金髪のエンタテイナーに、彼がタレント性を具え、しかも無^{インセンス}趣味などではないことを保証したのである。ライヒ＝ラニツキは、FAZの購読者すべてに向かって、とりとめもない歓喜への没頭に赦免をあたえたのだった。たとえば、スキー・プレイヤーが生玉子の敷かれたゲレンデを、卵をつぶさずに滑ることができるだろうか。これは <ベテランのヴァラエティ・プロデューサー> によって企画されたものだが、大人たちをも大いに喜ばせた。さりとして、その大人たちの <知能指数は子供並み> では決してなかった。

ポピュラー・エンタテインメントが見せるかかる社会的な恰幅の程は、20世紀を通じたドイツ社会の変化を映している。とりわけ <教養人士> のあり様である。同時に、大衆娯楽をめぐるディスクールは、賃労働に依拠する下層者たちの文化的な見栄えを論じるものでもある。そこでは、学者の姿勢 (Habitus) と <素朴な人々>^{ハビトゥス} ² の嗜好 (Geschmack) が、あたかも磁石の両極のような関係に立っている。

ライヒ＝ラニツキは、ポピュラー・エンタテインメントの社会的位置に起きた波及効果に富

1 Marcel Reich-Ranicki, *Geschmacklosigkeit kennt er nicht. Wunder zwischen Nathan, Faust, Hans Albers und Escamillo: Gottschalks „Wetten, daß....“*. Frankfurter Allgemeine Zeitung (FAZ), 4.V.1992.

2 ここでは <素朴な人々> (einfache Leute) を <非教養人士> (die Ungebildeten) と同義で用いる。

んだ変化をまざまざと見せてくれる。それは、大衆文化の観念が人間の営みから成る社会の見本そのものにまで移行した様である。ディスクールの変遷のなかで、有識者³の新たな姿勢が表に出るようになった、とテーゼは指摘する。すなわち、ポピュラー⁴な好みという契機をアカデミズムの人士が余暇に取り入れたために、文化産業*による満足をめぐる言い方が変わってきたのである。これが同時に意味するのは、モダンなポピュラー・カルチャーがこれまで排斥され圏外に置かれていたのが、ニュートラルとされ、それどころが認知されたことである。

ここに見られるのは（これがテーゼの第二部だが）、文化的な接収の諸特徴である。私たちが1970年代に労働者文化を評価しようとしたときにもちいた合言葉の一つはこうだった。〈ある人はゲーテを大事にし、他の人にはゲーテの代わりにサッカーが位置している〉。今日では、ゲーテを大事にする人々が、ゴットシャルクをも自己のライフスタイルに合うと高らかに口にする。ではゴットシャルクしか大事ではない人々はどうなるのか。すなわち、ライフスタイルの分野において、ゴットシャルクが嗜好のアイドルであり、テリトリーの標識であるような人々である。表現のあり方がそうであるとみとめられる人々にあっても、文化的な自意識は成長をとげることできる。エンタテインメントにおける新しい極端に〈無嗜好な〉形態のなかで自己のアイデンティティを主張するようにうながされていると感じ取る人々もいる。接収は却って棘の装着を促す。すなわち、遊びはどこまでも伸びて行く。

^{くるま}車陣を組む教養人士：〈大衆文化〉という座標

1945年から1960年に至る期間、西ドイツのアカデミカーの世界像における鍵になる概念は〈大衆〉(Masse)だった。〈大衆文化〉(Massenkultur)の観念もそこに重なった。それが指し示すのは、映画、娯楽音楽、ラジオ、テレビ、読み切り小説、写真新聞、ゴシップ新聞であった。これらは、商業的に生産され、私的に消費されるメディアであり、それゆえ民衆教育を事とする者のコントロールを受けていない。〈大衆文化〉はアンチ・カルチャーであった。ウルリッヒ・ベールの1960/61年に三刷を数えた〈若者の秘かな教育者〉への弾劾の本は、〈文明機関銃の炸裂音〉をこれ以上聞き逃してはならないと警告し

3 有識者 (die Intelligenz) の概念に含まれるのは、大学および専門学校を卒業した人々や文化的な職種に従事する人々 (藝術家, 図書館人, ジャーナリストなど) である。ここでは〈アカデミカー〉や〈教養人士〉や〈教養層〉を同義でもちいる。

4 „populär“ の概念は、経験的には、多数の公衆に好まれるところのものを指す。„populär“ は、〈民衆文化の〉を指すが、それは二種の位相の重なりでもある。すなわち、社会的下層に属する表現形態であり、同時に近代の民衆 (民俗) 文化の伝統に立つ表現形態である。

た⁵。<映画という遣り手婆>、ブラウン管という<電気ばあちゃん>、そこに現れる<いかにも先生というテレビ>、これらへの攻撃であったが、そこで基準になっていたのは健全な家庭であった。すなわち、教育機関から伸びる長い触手のような家庭がそこでは想定されていた。

マス・メディアへの攻撃と対^つになっていたのは、<その場限りの薄っぺらな満足と享楽を狙い打つ消費社会……文化的退廃としか言いようのない諸々の現象>への根こそぎの批判であった⁶。<コマーシャルイズム化された社会>に襲いかかるのは、<物質的価値の圧倒的な増大という危険であり、高次の文化的価値の血を奪って死滅せしめる功利的な物質主義の危険>⁷であった。<理想主義>の陰にかくれているのは、<大衆文化への侮蔑と見えはするが、実際には大衆そのもののへの侮蔑>⁸であった。この意味において、<大衆文化>は、(トーマス・クーンの言い方を借りるなら)1950年代の<ノーマルな文化分析>と呼んでもよいところのものの指標、すなわち個々の事例省察にも影響する拘束的なモデル⁹となった。

その基本思想はどのような様相を見せただろうか¹⁰。関係の中心点は藝術作品 (Kunstwerk)

⁵ Ulrich Beer, *Geheime Mütterzieher der Jugend*. 3. Aufl. Düsseldorf 1961, S.17. 以下の引用はS.35, 41, 7である。同書はすでにタイトルが、ドイツ帝国時代のポピュラー・カルチャーの小市民性への批判と結びついている。; なお1905年には、ハムブルクにおいて、近似した語を含む次の著作の第5版が刊行された。参照, Jakob Loewenberg, *Geheime Mütterzieher. Studien und Plaudereien über Eltern und Erzieher*. (5) 1905.

⁶ Nikolaus Manz, *Diskussionsbeitrag* In: *Untergang oder Übergang*, 1. Internationaler Kulturkritikkongress in München 1958. München-Gräfelfing 1959, S.208.

⁷ Oswald von Nell-Breuning, *Unsere Gesellschaft und ihr kulturelles Gesicht*. Ebd., S.127-141, hier S.140.

⁸ Umberto Eco, *Apokalyptiker und Integrierte. Zur kritischen Kritik des Massenkultur*. Frankfurt a.M. 1986, S.39.

⁹ <ノーマルな学問> (normale Wissenschaft) の基盤としての学問的パラダイグマの規定は、筆者の見るところ、現代文化をめぐる出版界や教育界の議論のネットの全体に向けて広げることが可能である。参照, Thomas S. Kuhn, *Die Struktur wissenschaftlicher Revolutionen*. Frankfurt a.M. 1967, S.28-30.

¹⁰ 最も重要は幾つかの視座は次の論集において跡付けることができる。Bernard Rosenberg, David M. White (Hrsg.), *Mass Culture. The Popular Arts in America*. Glencoe, Ill. 1957.; Norman Jacobs (Hrsg.), *Culture for the Millions?* Princeton/N.J. 1961.; 理念の歴史については次を参照, Salvador Giner, *Mass Society*. London 1976.; Patrick Brantlinger, *Bred & Circuses. Theories of Mass Culture as Social Decay*. Ithaca/NY. 1983.; Norbert Krenzlin (Hrsg.), *Zwischen Angstmetapher und Terminus. Theorien der Massenkultur seit Nietzsche*. Berlin 1992.; 西ドイツにおける大衆文化批判の代表的存在としてはフランクフルト学派に加えて次を挙げる。Hendrik de Man, *Vermassung und Kulturverfall*. Bern 1951.; Günther Anders, *Die Antiquiertheit des Menschen*. München 1956, またこれに付された次の論考, *Die Welt als Phantom und Matrize*.; しかし同時代の文化と社会をめぐるディスカールの総体に貫流しているのは、このパラダイグマの公理であることはたとえば次を参照, *Untergang* (注6.); また概観には次を参照, Hermann Glaser, *Kulturgeschichte der Bundesrepublik Deutschland. Bd.2: Zwischen Grundgesetz und Großer Koalition 1949-1967*. München 1986, S.81-85, 173-177.; Jost Hermand, *Kultur im Wiederaufbau*. München 1986, S.244-250, 484-520.

という昂揚した概念で¹¹、その概念はまた適切な受容の仕方をも提示した。大衆文化は、この基準に対して欠損を伴う逸脱として現れた。民俗文化がそのメルクマールとして成熟や人間的なコミュニケーションや権威をそなえているのとは相違して、大衆文化は、無名の公衆がマスメディアによって連続的なメッセージをあたえられ、また国民経済の市場において娯楽商品を扱って競争する私企業によって言い寄られるというのである¹²。生産品は、物品美学の装置によって点検されるが、その美学は受容者のどんな独自性もはじき飛ばしてしまった。そこでは、公衆の意識は、大衆文化の（批判によって明るみに出された）特質や内容と照応するという仮定であった。他のすべて、つまり規格化・水準低下・嗜好の粗雑化といった鋼のごとき法則も、畢竟、この原型から導き出された。

拡散や衝突も、この型見本の土台の上でこそ可能になったのだった。アングロサクソン系の議論のなかであらわれた代表的な見解もそうである。曰く、大衆文化は自由社会のなかの文化発展における概ね罪のない、早晩克服されるべき中間階梯である¹³、と。ドイツ連邦共和国では、かかる解説は賛同者をもたなかった。ドイツでは、19世紀以来、錯乱した社会的多数者への不安が注入されていた。その多数者は、学問や教育による整頓をすりぬけ、官庁の管理からみ出るがゆえに、規則につながとめる手立てがないかのように見えたのである¹⁴。賃労働の人間たちに購買力の高まりや余暇をもたらした変化に待ったをかける上で、〈大衆文化〉というレッテルには目覚ましいものがあつた。それは、〈大衆という人間たち〉が興味をしめす商品類を価値低いものとみなし、それによって〈文化的な無品位〉（ブルデュ）*としてマーケティングするための差別の手段となつた。そこには、プロレタリアートの自制なき享楽と浅薄な満足といった19世紀のトポスのすべてが見出されるであろう。

ここで一つのアクセントに照明を当てる必要がある。豊かな階級の無趣味と粗野なひけらかしは、突き放しておかねばならないことである¹⁵。持てるブルジョワジーに対抗して、文化という資本を引き合いに出して教養層の優位を主張する19世紀の動向はよく知られ

11 ハンナ・アーレントによると、〈文化を論じるには、藝術作品を起点にするに如くはない〉。参照、Hannah Arendt, *Kultur und Politik*. In: *Untergang* (6), S.35-66, hier S.51. この考え方は、マックス・ホルクハイマーが既に発展させていた。参照、Max Horkheimer, *Neue Kunst und Massenkultur*. In: Ders., *Gesammelte Schriften*. Bd.4. Frankfurt am Main. 1988, S.419/438 (最初, „Art and Mass Culture“ のタイトルで次の専門誌に発表された。参照, In: *Zeitschrift für Sozialforschung*, IX [1941]).

12 特に、ギーナー（注10）の大衆文化の理論の中心的な諸テーゼがこれを説いている。

13 たとえば次を参照、Edward Shils, *Mass Society and its Culture*. In: N. Jacobs (注10), p.1-27.

14 参照、Nori Möding, *Die Angst des Bürgers vor der Masse*. Berlin 1984.; Helmut König, *Zivilisation und Leidenschaften. Die Masse im bürgerlichen Zeitalter*. Reinbek 1992.

15 たとえばH.デ・マン（注10, S.56）は、基準をつくるものとしての上層を批判した。〈貧しい人々は、昔も今も、富める者をまねようとする。しかし富める者たちは野卑にふるまう一方なものだから、全体が（sic!）野卑の坂道を必然的に転がりおちてゆく〉。

てもいるが、それが先鋭になるのを促したのは大衆化というコンセプトであった。<経済の奇跡> に抗して教養市民層の理想にしがみついていた知識人のなかの社会的にアクティブな一部分¹⁶も、片隅においやられた。彼らにとって、文化グループの核をなすのは、市民性そのものとアカデミックな職掌のなかの新ユマニズムの立脚点であった。すでに1920年代末にオルテガ・イ・ガセト* が『大衆の反逆』によって定義したところものが、1950年代のドイツ連邦共和国では看過し得なくなっていた。<大衆という人間> はもはや <危険な階層> には入らなくなくなり、むしろ一般的な現象であった。社会構成のなかの上下をひっくりめた大衆的な人間のタイプに組み込まれて、かの教養人たちは車陣を組んで立てこもり、自分たちの生活形態に対立するあらゆる青写真をマス化であるとして難詰した。

1945年以後、アカデミカーの新たな出で立ち、<一般的なオピニオン・リーダーシップを誇りとする価値づけのエリート> としてであった¹⁷。しかし表玄関のレトリックの内側では、すでに教養市民層の姿勢はしっかりしたものではなくなっていた。それが明らかなのは、もはや教育や文化や出版にかかわる人士ではなくなっていたことであろう。むしろ、医師、建築士、弁護士といった自由業の人々がかわることによって、<物質主義的な> 経営者の思考と行動が顕著になっていた。冷蔵庫、電話、乗用車、カメラといった豊かさならでは物質財を率先して購入したのは、収入の多い知識人たちであった¹⁸。アカデミックな知的な教養人たちは、教養市民の理想から離れる一方であった。<身分に相応しい生き方> も、個人的教養や藝術や家庭音楽や高水準の社交に結晶するプライベート空間を仕上げるには、ほとんど役立たなかった。生活を快適ならしめる魅力に富んだ新しいライブの世界、感覚をそそる物質的な楽しみ、技術機器、これらは彼ら自身によって追い求められた。

16 この種類に先ず数えられるのは、精神科学や国家学の大学教員、ギュムナジウムの教師、聖職者、藝術家、コラムニストであった。教養市民層のなかの社会的にアクティブな核という考え方はクラウス・ヴォンドゥングによる。参照、Klaus Vondung, *Zur Lage der Gebildeten in der wilhelminischen Zeit*. In: Der. (Hrsg.), *Das wilhelminische Bildungsbürgertum. Zur Sozialgeschichte seiner Ideen*. Göttingen 1976, S.20–33. insbes. S.26f.; 教養市民層の精神的・社会的プロフィールの一般的な特徴は次を参照、Jürgen Kocka (Hrsg.), *Bildungsbürgertum im 19. Jahrhundert*. Teil IV: Politischer Einfluß und gesellschaftliche Formation. Stuttgart 1989.

17 Hannes Siegrist, *Der Akademiker als Bürger. Die westdeutschen gebildeten Mittelklassen 1945–1965 in historischer Perspektive*. Manuskript, S.12. (このオリジナル版では <価値づけのエリート> が強調されている), なおこの論考は次の論集に収録された。参照、Wolfram Fischer-Rosenthal, Peter Alheit, Erika M. Hoerning (Hrsg.), *Biographiken in Deutschland*. Opladen 1994.

18 参照、Kaspar Maase, *Alltagskultur der 1950er Jahre in der Bundesrepublik: Ein Forschungsüberblick*. In: Peter Alheit, Dietrich Mühlberg unter Mitarbeit von Kaspar Maase, Ina Merkel, Gerlinde Petzoldt und Klaus Spieler, *Arbeiterleben in den 1950er*. Bremen 1990, S.44–48.

1950年代の大衆文化をめぐるディスクール、その歴史的な前身である帝政時代のガラクタ戦争とは異なったプロフィールを見せた¹⁹。ディスクールは、下層の〈平民的な〉趣味の非正統性を言いたてた。同時に、教養市民的伝統の擁護者たちは、物質主義と文化退廃をやり玉に挙げて、知識者たちの競合中の生活観を新ユマニズムの理想にしばりつけることに躍起になった。文化的な原理主義は、文藝欄や、政治家の言説における西洋的レトリックや、教育などの分野での制空権をまもり抜こうとした。しかし大衆文化のパラダイグマはロードグリップの喪失を覆いかくした。

文化を批判する人たちの言うとおりであった。彼らの目に映ったのは、若者たちの成長であり、若者たちはやがてアカデミックな人間としても、新しい文化の指標を追いかけた。指標、すなわち〈教養〉ではなく〈ライブ〉である。ゲルハルト・シュルツェは、かかる変化のいくつかの出発点を特定した。USAのリズムとアクションを受容しつつ、スターたちが、教養層の高次文化と下層の通俗文化という文化に野における従来の二極性を容赦なく打破する〈刺激に富む図式〉を創始した、と言う²⁰。

〈ライブ社会〉というシュルツェのモデルは、生活スタイルによる社会のパラダイグマという定義を押しつけた。この〈ライブ社会〉が始まったのは、ドイツでは1980年代初めであり、その端的な目安は〈ライフスタイル〉(Life-style)という現代ではまったく一般的になっている言葉であった。この方面の文献をみるなら、適切な観察や説得力に富んだ具体的な資料が少なくない²¹。のみならず、それらは、多様なライフスタイルが**総体文化**

¹⁹ 概観には次を参照, Georg Jäger, *Der Kampf gegen Schmutz und Schund. Die Reaktion der Gebildeten auf die Unterhaltungsindustrie*. In: Archiv für Geschichte des Buchwesens, 31 (1988), S.163-191.; また次も参照, Rudolf Schenda, *Schundliteratur und Kriegsliteratur*. In: Ders., *Die Lesestoffe der kleinen Leute*. München 1976, S.78-104.

²⁰ Gerhard Schulze, *Die Erlebnisgesellschaft. Kulturosoziologie der Gegenwart*. Frankfurt a.M./NY 1992, S.153f.; なお文化の規則への〈アメリカナイズ〉(Amerikanisierung)の結果については次の拙著を参照, Kaspar Maase, *BRAVO Amerika. Erkundung zur Jugendkultur der Bundesrepublik in den fünfziger Jahren*. Hamburg, 1992.

²¹ 参照, Hans Ulrich Gumbrecht, K. Ludwig Pfeiffer (Hrsg.), *Stil*. Frankfurt a.M. 1986.; Bazon Brock, Hans U. Reck, Internationales Designzentrum Berlin (Hrsg.), *Stilwandel*. Köln 1986.; また経験的な社会科学の研究としては次を参照, SINUS, *Planungsdaten für eine mehrheitsfähige SPD*. Heidelberg 1984.; Ders., *SINUS Lebensweltforschung – ein kreatives Konzept*. Heidelberg o.J.; Dies., *Wohnwelten in Deutschland*. Offenburg 1986.; Peter Gluchowski, *Lebensstile und Wandel der Wählerschaft in der Bundesrepublik Deutschland*. In: Aus Politik und Zeitgeschichte, Heft B12/87, S.18-32.; Ders., *Freizeit und Lebensstile*. Erkrath 1988.; また社会学のなかでの現象学的・文化主義的な傾向に促されたことについては次の文献を参照, Friedhelm Neidhardt, M. Rainer Lepsius, Johannes Weiss (Hrsg.), *Kultur und Gesellschaft. Sonderheft 27 der Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpolitik*, Opladen 1986.; Hans-Georg Soeffner (Hrsg.), *Kultur und Alltag*. ↗

へと編みあげられてゆく法則と類型について仮説の糸口をも供給してくれる。それらがなぞったのは、パラダイクマが根底から変化する様子に他ならない。

そこでの基本的な考え方に簡単にふれたい。中心になる公理は、日常生活の審美化であるが、これは、社会的に認知されたどんな基準にもあてはまらない。それは、理論家たちのあいだでも、実際に生きて活動する人々のあいだでもあてはまらない。それにライフスタイルなるものは、とりわけ、上層・下層の区分からはみ出してしまう。経済的な必要性と階層に特殊な文化の型から解きはなたれて（個別化）へ向かい、人々は様式化^{スタイル}の論理に身をゆだねる。それも二重の意味においてである。内側へ向けては個々人はある種の強い標識をかみしめ、また外に向けては密度の濃い特殊な生き方がシグナルとして発せられる。日常美学の諸々のシンボルは、社会分野のなかでは先端的な方向指示と認められる。諸々のライフスタイルのグループから、アクション性のある社会像が構成されるのである。

自己のものならざる表現形態やライヴ類型を相手にして、ライフスタイルの理論家たちは、世慣れた調子で主導権を追い求める。すなわち、平常心と好奇心と、疎遠なものによる刺激効果の混ぜものに手をのばす。彼らが好んで依拠するのは、都市研究家リヒャルト・ゼンネットが<差異の文化>に向けた最終弁論である²²。大衆文化ディスクールと比較するなら、（高次文化には入らない）娯楽商品との交流は様相が異なることは見まがいがよいがない。すでに1956年には、ポップ・アートは息抜きに奉仕し得るとの命題は運命的なものとなっていた。

流行歌の内面的な欺瞞と無価値あるいはブギやビーバップの騒々しい醜悪を擁護しようとする者が、決まって言い立てたのは、要するに<息抜き>だから、ということだった。実際には、大衆の心のなかでは、我らが民^{フォルク}の実質的・文化的価値や尊^{とう}きは、疾に

✓ Göttingen 1988.; Max Haller, Hans J. Hoffmann-Nowotny, Wolfgang Zapf (Hrsg.), *Kultur und Gesellschaft. Verhandlungen des 24. Deutschen Soziologisches, des 11. Österreichischen Soziologentages und des 8. Kongress der Schweizerischen Gesellschaft für Soziologie*. Frankfurt a.M./NY 1989.; これらの社会学の動静に影響されて、<ライフスタイル>の概念が文化政策の議論を方向づけられ、<ライフスタイル社会> (Gesellschaft der Lebensstile) が<合言葉> (Formel) として浮上した。これについては次を参照, *Ästhetik und Kommunikation* 18 (1988) H.70/71: „Lebensstile“.; Volker Hauff (Hrsg.), *Stadt und Lebensstil. Thema Stadtkultur*. Weinheim/Basel 1988.; *Lebensstil und Gesellschaft – Gesellschaft der Lebensstile? Neue kulturpolitische Herausforderungen*. Hagen/Loccum 1990.; この数年の動向では、西ドイツの研究者たちは、ライフスタイル空間を資本・階級・シンボルの攻撃 (symbolische Gewalt) の再生産の場と考えるボルデューからの刺激を、<ヒエラルヒーの秩序無きライフスタイル諸グループ>という審美的な構成体に変形させた (G. Shulze [注20], 17)。

²² 参照, Richard Sennet, *Civitas. Die Großstadt und die Kultur des Unterschieds*. Frankfurt a.M. 1991.; Ders., *Verfall und Ende des öffentlichen Lebens*. Frankfurt a.M. 1986.

忌避され、忘れられ、否定され、誹謗されるものとなっていたのである²³。

1992年、ライヒ＝ラニツキは、生卵を滑るスキーの娯楽に認証をあたえた。ライフスタイル理論家たちに従うなら、下層の諸層をその低劣な趣味のゆえに排斥するのは、歴史の遺物と化している。〈マイノリティたちのパッチワーク〉には、もはやヒエラルヒーは消滅した²⁴。諸々のライフスタイル・グループが形成され、互いに競い合って、高度に複合的で動きのあるレジャーの規則を迫及しており、その結果、チャンスを逃さない空想豊かな勝負師たちは、保守そのものの針のごときピンストライプの網目をずっと緩く編んでいる。ライフスタイル・パラダイグマの上にただよるのは、ディスコの空気とその息吹にほかならない。“Don't worry, be happy”-Soundである。もちろん疑義も頭をもたげる。〈ライブ社会〉が夢見るのは、つまるところ〈黄金の〉70年代や80年代ではないか、と。脱工業化、職場の崩壊、貧困、エスニックな分裂、これらによって〈再生ドイツ〉(D. クレッサン)*でも、そのコンセプトは古くなってしまったのでは、と言う。

しかし、数百万人に及ぶとは言え社会福祉の受給者のゆえに、新たなパラダイグマの代表者たちを一斉に敗走させるのは、ピュロスの勝利*ではあるまいか。戦線には、ライフスタイル研究者たちが提示するありあらゆる実物が残っていた。ドイツ連邦共和国は、1990年10月3日をもって袋詰めされ、1890年や1920年あるいは1950年に送り返されたわけではない。ライヴ・パラダイグマに照らし出されるのは、特に統一の勝者たちである。

筆者の思うには、パラダイグマの転換には常に〈変則〉が前提となるところまで、クーンの着想を押し広げてみることもできるだろう。ノーマルな学問に属する推移予測にはかたくなに刃向うような展開である。ぶっちゃけた言い方をするなら、この場合、変則とは、取り残された西洋の没落なのだ。大衆文化パラダイグマのなかでは、あらゆるベクトルが下降をしめしている。すなわち規準を定める存在としてのエリートの委縮と影響力低下、教養の平板化、文化的遺産の投げ売り、大衆的な満足の粗放化である。しかし、〈大衆文化〉に通じていた計測器が今日も低下のシグナルを示していないわけでは断じてない。古きパラダイグマは生きている。その擁護者たちは雄叫びを挙げる。〈我々は死ぬまで楽しむのだ〉。しばらく前から〈読書能力の喪失〉が危機の恐ろしい標識となっている。文章と文字に対して絵やイラストが勝利を見せ、西洋の〈我考ふ、故に我あり〉の否定として

23 Friedl Schröder, *Gefahr und Not der Halbstarcken*. In: Deutsche Allgemeine Lehrerzeitung, 8 (1956), S.326-328, hier S.327.

24 ルーツイウス・ブルクハルトによれば、〈高次文化は次々にサブカルチャーへ〉なっている。参照、Lucius Burckhardt, *Der guet Geschmack*. In: B. Brock, H.U. Reck, IDZ (注21), S.37-52, 引用は S.51,

出現している²⁵。

ポピュラー・エンタテインメントによって文化への脅威と解されるような現実の動向も見られないわけではない。しかしそうした考察を旧来のパラディグマによる解釈でおこなう研究者は減少する一方である。その変遷を明らかならしめる上で、こう問うてみたい。過去40年間のあいだに、文化をめぐる主要なディスクルスを行った人々において何が変わったのか、と。

大衆文化からライフスタイル・パラディグマへの移行をよく映すのは、ドイツ連邦共和国の文化空間の構造変化である。ここの物象や活動あるいは嗜好表現はもはや認知か非認知か²⁶といった二次元的な尺度では位置づけられてはいない。絵や図になるほど高く位置づけられ、息苦しくなり感覚を拘束するにつれて、低い位置づけになる。それらが今や三次元の空間におかれている。それを認識するには、新たな尺度がなくてはならない。すなわち、ライブ密度である。ライブ性の軌道上にあるのは、ポピュラー・エンタテインメントやそこでの満足の高品質な品々だが、それらはほんの数十年前には俗っぽいとされていたのだ。社会的な高い位置にある諸々のグループのライフスタイルのなかで取り上げられたのは、緊張、テンポ、肉体性、感覚の克服、サブライズ、技術機器による陶酔などである。現代の古典主義者には死ぬほど疲れる話であろうが、<新たな不透明性>のなかで、旧来の差別の原型が瓦解している。ポピュラーな嗜好の核心的な組成が正当として認知されているとも見える。

不透明なのは、アカデミックな文化解釈者における^{ハビトゥス}姿勢とライフスタイルの変遷、また彼らの共鳴空間すなわち知性なものにおける変容である。教養あるものとしてのその相貌に価値をおいた人は、1960年代の半ばまではテレビを持たなかったものである！1950年代まで遡るなら、ゲルマニスティクや哲学の学生でも、仲間からはじかれる危険をおかさずして、西部劇やギャング・スターの映画の愛好を公言できたであろうか。今日では、若い研究者はいわばケーブルと接続されていて、ビデオ・コレクションに『カサブランカ』* や『ウエスタン』* や『羊たちの沈黙』* をそなえている。クリント・イーストウッド

25 たとえば次の論集に収録された多数の論考を参照, Werner D. Fröhlich, Rolf Zitzlsperger, Bodo Franzmann (Hrsg.), *Die verstellte Welt. Beiträge zur Medienökologie*. Frankfurt a.M. 1988.; 読解能力の向上とは文化的な推論力であるがために、ドイツ連邦共和国のマジョリテイがそれを獲得するのは不可能ということになる。大衆文化パラディグマを土台にすると、この問題はデモクラシーのパースペクティブで扱うことはできない。これについては次の拙論を参照, Kaspar Maase, *Kulturelle Selbstausschluß – ein ewiger Kreislauf? Zur Debatte über Lesen und neue Medien*. In: *Das Argument* 32 (1990) Nr. 179, S.29-37.

26 ヘゲモニーの主張を目標とした嗜好認知については次を参照, Pierre Bourdieu, *Die feinen Unterschiede*. Frankfurt a.M. 1982, S.31-167.

の監督作品* や「ビーオの駅舎」* を楽しみ、ボリス・ベッカーの心理状態* を気にかけて、ローター・マテウスマテウスの最新の御乱行* に興味津々の同僚を見つけるのはたやすい。

経験的研究は、若者のあいだで従来の尺度の相対化が起きたことを確かめている。アルブレヒト・ゲッセルは、4世代を通じて知識層における文化理解の変遷を追跡した。美がオーラを放ちつつ際立つ領域からは、サービス産業の商品提供が、ライフスタイルに沿って美的形成を遂げたことが判明している²⁷。すでに1960年代の大学生のあいだでも、マカロニ・ウェスタン* やフォークやロック・ミュージックがポピュラー・エンタテイメントとして価値を高めはじめていた²⁸。高等教育を受けた40歳以下の人たちは、もはや<まじめな文化>と<エンタテイメント>という二極図式で考えたり行動したりしないと云っても間違いではあるまい。彼らのスタイルにあつては、シェーンベルク* とローリング・ストーンズ* あるいは美術館と映画館あるいは思索とアクションの境界が入り混じっているのが特徴である。また<破落戸たち>^{ころつき}の見た目のプリミティヴィズムにも、年長の高次文化層の古びたと感じの保守姿勢にも、二重に距離を置いている²⁹。

教養層の若者と年配者との決定的な違いは、シュルツェが<電圧型>* 呼んだものを受け入れによって成り立った。やや長めの引用になるが、事態をより鮮明にしてくれるであろう。はじめに音楽を取り上げるのは、そのスタイルが、50年代末から若い世代の姿勢に強く影響したからである。

80年代までは、音楽は…… 絶えざるダイナミズムの一部であった。五感の楽器が、音もリズムもより強烈なエレクトロ楽器に押しつけられた。…… 同時に公衆自身が動きに向かった。ボブ・ディランの最初のヨーロッパ・ツアーの映像には、観衆はクラシック音楽のコンサートと同じく黙りこくって座っている様子が見える。やがて大観衆がエクスタシーのうちに躍動するのが公演文化の確固たる構成素になっていった。

…… 家でも騒がしいのが好まれる。いつも何かスイッチが入っている。ラジオ、レ

27 Albrecht Göschel (unter Mitarbeit von Klaus Mittag), *Die Ungleichzeitigkeit in der Kultur. Wandel des Kulturbegriffs in vier Generationen*. Stuttgart/Berlin/Köln 1991.; 読書にかんする調査からは、若者たちの間での読み切り文藝でも、より程度の高いものはもはや社会的規準としては作用して、個々人の好みに合ったものが選ばれることが明らかになった。これについては次を参照, Angela Fritz, *Lesen im Medienumfeld*. Gütersloh 1991, S.39-43.

28 A. Göschel (注27), S.59-62. 一般的に言えることとして次の文言がある。<、高等教育を受けた人々にとっては、映画館へ行くのはようやく1960年代以後のことであった>.; Stephanie Henseler, *Soziologie des Kinopublikums*. Frankfurt a.M.u.a. 1987, S.41-43. Zit. S.41.

29 G. Schulze (20), insbes. S.312-321. すでに1970年代の材料の調査において、このモデルが表れている。; Helmut Giegler, *Dimensionen und Determinanten der Freizeit*. Opladen 1982, S.513-524.

マーゼ 「ポピュラー・エンタテインメント — <大衆文化> から <ライブ社会> へ」

コード、カセットレコーダーあるいはテレビ。人気があるのは推理ドラマやSF、それにラジオのポップ・ミュージックだ。そこに電話が重なることもめずらしくない。それに乗用車の発進は電圧型の不可欠の構成素である……

電流のある場所に座り、体をふるわせ、面白くなくなるとやめる。テレビを点けて、犯人追跡が映るまでチャンネルと切り換える。しばらく見ると、別のチャンネルに移る、犯人追跡はまだ完全には終わっていないのに、ディスコへ行く。そこで、音楽のオーラとライティングと会話の嵐とちょっぴりエロスのなかにひたり、しばらくするとふいと外へ出る。普段の状態でもあるこの電圧の美学こそ…… コンピューター・ゲームとスピード狂じみたドライブの根本原理である。³⁰

この描写で筆者を惹きつけるのは、男性の行動様態のめざましい報告となっていることである。しかしまた、ここで描かれているのが、若い労働者かホワイトカラーか高等学校生かそれとも大学生か、決定し得ないことである。

この電圧型は、ヴェブレンの言う有閑階級の生き様の誇示とちょうど対応する³¹。1950年代に日常文化論のなかで <享楽狂> や <身勝手主義としてのセンセーション> との戦い³²、またアメリカの <粗暴な> ダンスを野蛮と呼んだことがあったこと³³を思い出せば、三十年前には平民のセンスとして片づけられたものが、若い研究者たちのライフスタイルの特徴となっていることは明らかであろう³⁴。今日、高学歴の若者たちは、テレビのアクションものやSFを好み、またフリッパーやゲーム機に夢中になる点で、(専門学校まで終

³⁰ G. Schulze (注20), S.154, 155.

³¹ 参照, Thorstein Veblen, *Theorie der feinen Leute*. München 1971, ヴェブレンは、有閑階級が享楽を好み、そこで屈託なく生を満喫することができるものとして、排他的なスポーツやギャンブルを指摘した (S.191)。1920年代にニュー・リッチがカー・レースやボクシングやジャズに夢中になったことを、ここで想起してもよいだろう。

³² Ulrich Beer, *Literatur und Schund – eine Arbeitshilfe*. Düsseldorf 1963, S.11. – 電圧型 (Spannungsschema) の諸々の萌芽形態が槍玉に挙げられている。 <粗野に掻き立てられた天然色ニュースの様たるや、色彩さながら叫び立て、対立とグロテスクな歪曲である>。G. Siewerth, *Bild und Wort*. In: Probleme der Jugendliteratur. Ratingen 1956, S.25; Georg Schückler, *Probleme des literarischen Jugendschutzes*. Köln-Klettenberg 1958, S.14.

³³ 参照, Astrid Eichstedt, Bernd Polster, *Wie die Wilden. Tänze auf der Höhe ihrer Zeit*. Berlin 1985, S.92–110.

³⁴ アメリカの犯罪社会学者ミラーは、 <興奮> (Errgung) を <下層文化の結晶核> の一つとみなし、またその中身としては <緊張：危機感覚, 危険：変転・アクション> を挙げている。; Walter B. Miller, *Die Kultur der Unterschicht als ein Entstehungsmilieu für Bandendelinquenz*. In: Fritz Sack, Rene König (Hg.), *Kriminalsoziologie*. Frankfurt am Main 1968, S.339–359, 引用：S.342.

えていたり、それどころか大学まで出た自分の両親よりも) 同年齢の中卒者にはるかに近い³⁵。経験的研究は、若者たち、それも資質の高い者のあいだのこととして³⁶、伝統的な高次文化の諸要素を、アクションやロックやポピュラー・エンタテインメントと結び付けるトレンドがあることを明らかにしている。たとえば1989年に実施された「文化とメディア」の調査研究によれば、クラシックな文化領域に〈通じた人たち〉は、正当的な文化的拠点に加えて、ミュージック・スナックやロック・コンサートやポップス・コンサートにも参加する度合いが、他の種類のグループよりも多いのである。純然たるクラシック・ファンを別とすれば、ディスコに出入りする大多数は彼らと重なるのである。高等学校卒業有資格者や大学生への質問では、ロックやポップスのエキスパートは、クラシック音楽に高い知識を持つ者の約1.5倍であった³⁷。〈文化に高い関心をもつ人々〉がスポーツ中継や娯楽映画やテレビ・ドラマを見る割合は平均値よりも高く、アクションやシリーズものについても(平均値よりも低いとは言え)その視聴率は高い。オーストリアの調査研究もシュルツェの成果と一致する。40歳台から70歳台にかけて伝統的な高次文化類型が最も広く分布しているが、高等教育を受けた若者たちは正当派であるだけでなく、ロックやポップスや〈アウトドア〉活動をも歓迎する〈ユニヴァーサルな文化傾向〉を示している³⁸。

筆者の推測では、若い知識層が電圧型を受け入れ、また同年齢の労働者の余暇構成への接近をしめすとしても、核心部ではその逆は成り立たない。〈ポピュラー・エンタテインメントに抗する教養市民層の闘い〉の章は終わった。メディアに多大の影響力を及ぼしたニール・ポストマンと彼の率いるグループによるカッサンドラー演出*もその点では何も変化をもたらさなかった。新ユマニズム的な教養理解そのものは枯渇した。読書に関する調査研究が示しているように、1940年代以来、〈文化的な両親の家〉で育ち、学業の年月が長い者の割合は低下する一方である。測る基準は、両親が子供たちに本を読み聞かせるか、子供たちと一緒に本について話し合うか、子供たちに楽器を習わせたりクラシック音楽を聞かせたりするか、であった³⁹。

35 参照, G. Schulze (注20), S.638, Tab. 5.1.

36 その際、限定的ながらあてはまることとして(これはシュルツェとつてもそうであるが)、かなり長期の教養と高密度の文化的関心をそなえて集団のなかでは、アカデミカーが特に排除されることはない。

37 参照, Bernward Frank, Gerhard Maletzke, Karl H. Müller-Sachse, *Kultur und Medien. Angebote – Interessen – Verhalten. Eine Studie der ARD/ZDF-Medienkommission*. Baden-Baden 1991, S.279f.

38 参照, Rudolf Bretschneider, *Kultur im Leben der Österreicher*. In: *Media-Perspektiven* 4/1992, S.268–278, hier S.274f.

39 A. Fritz (注27), S.50f. 1987年に行なわれた調査でも、40歳以下では〈文化的・知的・教養的な気圏の社会化〉が著しく低下していることが明らかにされた。Ulrich Saxer, Wolfgang Langebucher, Angela Fritz, *Kommunikationsverhalten und Medien. Leser in der modernen Gesellschaft*. Gütersloh 1989, S.145.

<ライブ社会> のパラディグマは、教養市民層から^{モデルン}現在の知識層への行程の最終地点に位置している。それが表わすのは、今日のアカデミカーの姿勢と余暇構成が変化し続けていることである。しかし、この層を超えてなおそのパラディグマが妥当するかどうかについては、筆者は疑問を（その点ではプラカードを掲げることが避けられないにせよ）呈したい。

センスある言葉と、社会的ヒエラルヒー化の文法

加えて、文化的資源への関わり方を根底において決定づけるものとして、（いずれも新しいパラディグマのなかでは三流的な扱いか、あるいはまったく言及されない次元ながら、物質偏重の批判にこたえる意味でも）資本活用のシステムのなかでの姿勢や、エスニシティや、性差を挙げることができよう。もっとも、<文化の物質主義>（ウィリアムズ*）の思考に属するものとしては、人間は道具を作る動物（toolmaking animal）や政治的な生物（zoon politicon）* であるだけでなく、カーシーラーの言う <シンボルの動物>（animal symbolicum）⁴⁰ でもある。社会の諸階層や諸集団が自己を構成するが、それは自意識とは無縁な土台の上においてであり、他者と自己を知覚する区分的を超えてもいる。さまざまな特質がこの過程において、すなわち外からの方向付けと集団自身の経験解釈のあいだの持続的な交錯においてはじめて、文化的差異として意味のある標識となる。

ブルデューが指摘した通り、センスとライフスタイルは差別分類の対象であり、またその手段でもある。そこでは、正統性やシンボル資本の相場がさぐられる。現代の市民的・資本主義的社会のなかでは、<無教養の> 民衆層という文化的毒薬は、権力と特権へ通じる上昇路と交流圏内への入り口になる。のみならず、文化的な選別・特定のメカニズムのおもむくところとして、はじき出された人々が、独自の <文化的な無品位> を内面化し⁴¹、生き方のチャンスと牽引的な位置から排除されるのを受けいれる⁴²。かくして歴史的には、（そこにヘゲモニーの根拠が存するところの）ウィリアムズの言う <フィーリングの構造>（structure of feeling）が形成され再生産される。<大衆文化> という評決は、上昇へ向かう教養市民層の文化的資本への表記の仕方であるだけでない。その評決はまた同様に、そのセンスが野蛮で外から操作されていると低くみられる人々の自意識をも損傷する。

40 Ernst Cassirer, *Was ist der Mensch? Versuch einer Philosophie der menschlichen Kultur*. Stuttgart 1960, S.40.; また次も参照, Ders., *Zur Logik der Kulturwissenschaften*. Göteborg 1942, S.30f., S.138, passim.

41 Pierre Bourdieu, Jean Claude Passeron, *Grundlagen einer Theorie der symbolischen Gewalt*. Frankfurt a.M. 1973, S.57.

42 詳しくは次の拙著を参照, Kaspar Maase, *Lebensweise der Lohnarbeiter in der Freizeit*. Frankfurt a.M. 1984, S.40-42, S.239-247.

教養人の姿勢変化とライフスタイル・パラダイグマについて、ここで何が変わるのだろうか？ 方法論的に先ず何よりも言えることだが、アカデミカーのセンスは孤立したものはみなし得ない。それは關係的、すなわち文化空間のなかでの他の諸々の地点と関わっている。センス、ライフスタイル、日常美学、これらを意味をもって口にすることができるのは、特定の諸特性のにない手が他者とアクティブに自己を区分し、それによって自己の特定の諸特性に、他者の諸特性との対比において意味を付与するときである。言い換えれば、かつて俗っぽい (vulgär) とかポピュラー (popular) として片づけられたセンスの契機が正統化されると共に、文化空間のなかでのあらゆるライフスタイルの位置が変わるのである。若いアカデミカーたちのあいだで余暇とセンスが共通し重なることを直視すると、また年配の教養人士の高次文化マスターピースの溶解⁴³を直視すると、(高等教育へと進まない) 賃労働者の様相と対比した場合の在来の区分メカニズムですらもはや通用しない。諸々の^{ハビトゥス}姿勢形態は接近し合っている。微妙な差異の新たな兆しが社会的懸隔をつづきさせると見えても、区分が起きるのは、あくまで共通の土台の上においてである。ポップ・カルチャーの諸特徴は共通文化⁴⁴に統合されるのであり、ライフスタイル理論家たちの多元主義もそれを考慮している。

<大衆文化> の概念そのものにも意味の変化が起きた。その含意する排除と見下しが消滅したわけではないが、今日それが先ず意味するのは <経験可能なことがらがすべての者に等しくあること>⁴⁵ にほかならない。これは、文化の無品位シンドロームや、さらに他者排除と自己排除の相互交替が連関と支配力を失ったと読みかえることもできよう。近視眼的、また表層だけでマニフェストを考えるのではなく、自己描写の心性がおもむろに崩壊するものとして自己を省察するなら、その仮説はあやしくなる。

基盤は変化しても、差別との戦いはなお続いている。昔の締め出しが崩れ、新たな区分を作り出すことがもとめられている。アンケート調査の大雑把な検査によっても、距離をおこうとする動きが活発であることが判明する。高等教育を受けなかった40歳以下の人々

43 参照, G. Schulze (20), S.644, Tab. 5.5.

44 共有文化 (Gemeinkultur) のコンセプトについては、筆者の次の教授資格申請論文 (未公開) を参照, Kaspar Maase, ‚Amerikanisierung der Jugend‘. Eine Studie zur kulturellen Verwestlichung der Bundesrepublik in den fünfziger Jahren. Bremen 1992, insbe. Kap. 9. [訳者補記] 教授資格申請論文は次のタイトルで刊行された, Kaspar Maase, BRAVO Amerika. Erkundungen zur Jugendkultur der Bundesrepublik in den fünfziger Jahren. Hamburg 1992 (Schriftenreihe des Hamburger Instituts für Sozialforschung).

45 G. Schulze, (20), S.264. <大衆文化> (Massenkultur) の概念が<冷めた> ことのシグナルは、百科事典からその見出し語が消えたことであろう。ブロックハウスの第17版 (1971年: Brockhaus Enzyklopädie) にはなおある程度の長さの解説がほどこされていたが、19版 (1991年) では削除された。またマイヤーではすでに第9版 (1975年: Meyers Enzyklopädisches Lexikon) において姿を消した。

にあつては、スポーツ観戦と身体を強調する活動への好みが顕著であるが、サーフィンやスキーでは後れをとっている。重量挙げと太極拳、女性サッカーと馬術の障害飛び越え競技、郊外のクラブ組織とヨットクラブ、これらの間には相当の距離が介在する。アカデミカーの子弟たちも、今日では、若い労働者と同じく、ロックやポップスのコンサートに出入りする。しかし後者では身体語やアウトフィットが様式にまでなっている面がある一方、前者は享楽のパッチワークにおける染みさながら生地に対して距離をとっているところがある。すくなくとも、大学のキャンパスではヘヴィメタルのタイプはなお極めて稀である。ブルデューがフランスについて指摘した様相は、ドイツでも経験的にたしかめられる。サービス部門や文化部門の新しい諸々の職種は、すでに部分的には中程度の学歴者のかかわるところとなっているが、それらが現今とりわけ意欲を向ける先は、幾つかのライフスタイル、すなわち（伝統的な社会的エリートや平均的な勤労者に対して）シンボリックな^{ポスト}位置の勝利者を約束する種類のライフスタイルである⁴⁶。

ライフスタイル社会を（日常美学の差異を）いわゆる平等志向の知覚によって特徴づけるのは、人間を文化的に解説・再解説するのよりもずっと後退することになるが、その証左には事欠かない。センス（Geschmack）の術語もここに属し、それは、今日なお社会的ヒエラルヒーの文法の一部となっている。しかし区分化の動向は速度が速まっており、古い境界の場合と新しい境界を引くことの間には、そこにおいてはじめて請求権があてはめられフィールドが成立する。

その際、若い教養層にかかわるライフスタイル・デザイナーは、戦術的な優位を駆使する。彼らは、<主職としての評価者たる司祭カースト>⁴⁷をそっくり演じて、文化的テキストを自分のディスクールに組み込んでゆく。エンタテインメント商品は、正統的批判の洗練された口調で使いこなす者を高く価値づけてくれる。内省をとまわずにしゃしゃりである体の楽しみ方は、低く価値づけられる。言葉の力は、文化的資本の主源泉と言ってよい。それは、ポピュラー・センス（populares Geschmack）の諸エレメントの実際的な取り込みを没収へと切り替える。高尚な文化評が切り結ぶ言葉の技は、ポピュラー・カルチャーのテキストには役立たない。グスタフ・ザイプト博士がFAZ紙上で「夕べのアレゴリー」のタイトルで<リンデン街>を論じているのがそうである。この<リンデン街>を読みやすくするためにウィットを入れ、目配せを散らして、ルーマン*の言う体系理論に調整したとしても⁴⁸ — エルヴィーン・アンダードッグ*の反応は、別のテレビを切り替えて、新

46 P. Bourdieu (注26), 特に <新たな小市民層> なる不幸な小見出しの下の次の箇所: S.561-584,

47 G. Schulze (注20), S.285.

48 FAZ, 20. Oktober 1992.: „Allegorien am Abend“ von Dr. Gustav Seibt (この記事に „Lindenstraße“ が論じられる).

しいお気に入りの番組を探すだけである。

植民地さながらの結束とネガティブなアイデンティティ

これによって、第二のテーゼに関わることになる。すなわち、文化的な自己放棄とそれへの反応である。ここでは、先ず流布している仮説を否定しなければならない。教養が低く作業仕事を専らとする賃労働者は、決してライフスタイル・プロフェッショナルの舞台づくりにおいて端役ではないからである⁴⁹。彼らは立派な役柄であり、自分たちのセンスを堂々と披露する。〈ライフスタイルの社会〉への彼らの反応は、なお未知の領域と言うべきであろう。

文化的な境界を取り崩すことを当然の善行とみなし、それが喜んで賛同されることを期待するのは、〈自分の国に生まれついた者たち〉に対抗する植民地主義者の営為のように思われる。他の人々はこれをどう見るだろう。収穫か、それとも攪乱か？ 認知か、それとも追放か？ ここではそのどちらかをきっぱり選択するのではなく、むしろ二つの契機を結び合わせ溶け合わせる方がはるかに生産的であろう。(しかし) ここですでに、以下の考察が負うことになる重荷が姿をあらわして来る。現今のポピュラー・カルチャーモダンに向かつて考察と理論的試行を重ねることだけが、それへの道であろうが、またそれは経験的な調査だけですむわけでもない。

ポピュラー・エンタテインメントの特定のジャンルへの共通の偏愛とそれに照応する集団行動が基本的・文化的営為をもたらすというのが、筆者の出発点である。すなわち、これらによってアイデンティティが安定的となるが、それは正に帰属経験と(願わしからざる)接触あるいは介入への拒否だからである。〈内側〉から、言い換えれば〈まともな社会〉から見ると排除と見えることがらも、別の面から見ると、特別視と自己主張の契機にほかならず、したがってアイデンティティ構成の重圧を鎮めることができる。これが特にあてはまるのは、審美的な境界の線引きが、誰もが知るような社会的境界と重なる場合である。

カール・ホップムートは、かかるスタイル形成を、若い長期失業者たちのいわば〈追剥たちの文化〉* に材料として分析した。安定した定職についているまっとうな規準社会の価値ならびに振る舞いの尺度に従うことは、彼らには、裏切り者と断じられる。この圧力に抗して、少なくとも自恃と意味の要素、それに加えて行動能力を発揮できるように、若

49 この点で、下層者は必要事に縛られた趣味しか持ち得ないというブルデューの見解に批判と否定をつきつけることにもなる。

者たちは、自己のリアリティに価値をみとめ、<ネガティブなアイデンティティ> を形づくる。

彼らは、自分たちの存在が締め出されたものであること、不安定で、常に脅かされ未来が無いことを、よく知っている。しかし彼らは、自分たちの状態の情動的価値を彼らなりに変えてしまう。社会的に所与の規定空間から、彼らは、自分たちに関する価値感情を切り離すと共に、そうした対抗的な立場を保ちつつける。彼らは、逼迫・貧困・汚れ・身体暴力・無感覚への不安をかかえながらプレイし、そのシンボリックな否定とはみ出しのプレイから彼らなりのアイデンティティを創りあげる。しかし、彼らは高い代償を払わなければならない。なぜなら、彼らがこのプレイをコントロールできる能力があることを信じてもらえるためには、強いられた自分たちの社会的ステータスをことさら様式化する以外にはないからである。⁵⁰

同様のメカニズムは、労働者文化の再生産においても、その根底にひそんでいる⁵¹。ヴォルフガング・カシュバは、<社会への距離が、シンボリックな形態にまでなった日常行動のなかで表出される> と語っている。その距離とは、公正の欠如や自己品位への自尊の欠如を、(集团的記憶の深みに定锚し経験な) 知覚していることにある⁵²。筆者の出発点は、この距離の表現形態には、ポピュラー・センスと、余暇ならびにエンタテインメントにおけるその表出も含まれることにある。彼らは、文化産業の商品をこなしながら、彼らの社会的対峙性の演じ方に応じて自己を変えてゆく。

この観点から、ドイツにおけるポピュラー・エンタテインメントの歴史は <抑圧的寛容> の拡大であったことが読みとれよう。かつてタブーであった品々がライフスタイル用品のセルフサービス店にも並ぶようになったために、彼らは距離を(常に歪みでもあった) 表現する上での連続的な可能性を奪われた。これが彼らに不安を掻き立て、自分たちのテリトリーであったその場所が、より上の層によって抑えられてしまったとの感覚を呼びおこす。その経験は、(だからと言ってリアルな社会的な差異が消滅と結びついているわけで

⁵⁰ Karl Hochmuth, *Von der Krise der Kultur zur Kultur der Krise. Oder: Der Mythos von der Kreuzberger Freibeuterkultur.* In: *Ästhetik und Kommunikation*, 18 (1988), Heft 70/71, S.57-70, Zit. S.64f.

⁵¹ 参照, Birgit Mahnkopf, *Verbürgerlichung. Die Legende vom Ende des Proletariats.* Frankfurt am Main/New York 185.

⁵² Wolfgang Kaschuba, *Arbeiterkultur heute: Ende oder Transfortion?* In: Ders., Gottfried Korff, Bernd Jürgen Warnecken (Hrsg.), *Arbeiterkultur seit 1945: Ende oder Veränderung?* Tübingen 1991, S.31-53, Zit. S.50.

もないときには) なおさらそうである。たとえば、映画館エリアの変遷を考えてみればよいであろう。そこは何十年にもわたって、プロレタリアートの若者文化の拠点だったのである⁵³。これに代わるものとして、商業地である市の中心部に映画館センターが出現した。

同じことが、余暇・娯楽の諸形態にも起きている。プロレタリアートやサブ・プロレタリアートの男性文化、また身体の力とテクニク、これらをめぐる古典的な質を披露する種類の諸形態である。これらによって、独自の位相における価値の意義と優越性をコミュニケーションの場で確かめることを彼らに得させていたのであった。1950年代でも、その道の通^{つう}や愛好家のローカルな集まりは、ポピュラー・カルチャのたまり場として、サッカー場やスタジアムを使っていた⁵⁴。今日では、そうしたローカルな集まりは、(外野席とVIP ラウンジの価格差に社会的不平等のモデルを感じとり、メディアによって政治やスポンサーやショービジネスのエリートとは違ったものとみなされる) 人々のなかでも周辺的なグループにすぎない。1970年代以来、プロレタリアートのファングループ⁵⁵が馬鹿騒ぎを起こしているが、それは果たして、かかるマージナルな経験への回答と言えるのであろうか。(最後の事例を引くなら)、男性の汗に彩られた体カスポーツからボディビル・ショーを経てフィットネス・クラブやボディ・シャエイピング・スタジオのアルマニの香りただよ場面までの経過は、どのように認識されてきたであろうか⁵⁶。

これへの回答の理論的な手がかりを最近示したのが、ミシェル・ド・セルトー⁵⁷とヨー

53 これについては、たとえば次の文献でも十分であろう。参照, Emilie Altenloh, *Soziologie des Kino*. Jena 1914.; また1960年代に始まる最終段階については次の文献を参照, Jürgen Theobaldy, *Sonntags Kino*. Berlin 1978.

54 参照, Rolf Lindner, Heinrich Th. Breuer, „Sind doch nicht alles Beckenbauers“. *Zur Sozialgeschichte des Fussballs im Ruhrgebiet*. Frankfurt am Main. 1978.; Dietrich Schulze-Marmelin, *Der gezahmte Fussball. Zur Geschichte eines subversiven Sports*. Göttingen 1992, S.144-156, S.219-242. このなかでHorst Wohlers (かつてFC Sankt Pauli Hamburgの監督) が、連邦リーグのスタジアムを人気球場にするプランを語っている。<皆ながすぐに足を運ぶのはオペラ座や劇場なのだ。サッカーには、立ち見席もあるのだから、まず交流の家になってもよいのじゃないか> (D. Schulze-Marmelin, S.219.)

55 次の(部分的には批判の視点をかいて自らもアイデンティティにのめりこんではいるが) 文献を参照, Ronald Lutz, Rndale, *Prügelei; Zur Gewalt der Jugendlichen*. In: Zeitschrift für Volkskunde, 89 (1993), S.34-48. Carola Lipp, *Protest und Gewalt*. Manuskript des Vortrags auf dem DGV-Kongress Passau 1993 – Rolf Brednich, Walter Hartinger (Hrsg.), *Gewalt in der Kultur*. Passau 1994.

56 諸事例が示すのは、現今(modern)なポピュラー・カルチャーとの関わり方における根本的にマイナス面である。目に入るのは、ほとんど専ら男性的で machistischな側面であり、女性的であることへ反対としてのスペクタクルであることが圧倒的である。以下の考察における説得性も、性差の面では不十分な解明に限定されざる他ない。

57 注49を参照。

ン・フィスケ⁵⁸であった。彼らの出発点は、強者（今の場合では文化産業）の営為によって素朴な人々が左右される文化的な環境⁵⁹のなかで創造的な自己主張がどうなるのか、その可能性を問うことにある。二人の研究者は、現代の民衆文化すなわち „Folk culture“ のいわばイデアル・タイプスを、社会的弱者のサヴァイヴァル・自己主張の貯蔵庫としてスケッチして見せた。ド・セルトーは、強者の <戦略> に対して、弱者の <戦術> について語る。工業資本主義の現代にあつて、ポピュラー・カルチャーはもはや仕来りと習俗*でもなく、社会主義的な集団主体を恒常的なものとして対象化した集成でもない。むしろ無意識の記憶（ベンヤミン*）の呈示と言ってよく、その基盤装置から <記号論的なゲリラ>（エーコ*）という意味攪乱が養われる。すなわち、諒解をもとめるのではなく、むしろ <分裂活動的な> 身体性・口頭性・手にとるような現存指向がポピュラー・カルチャーとポピュラー・エンタテインメントの活用を貫くことになる⁶⁰。

ポピュラー・カルチャーは何物をも創り出さない。それは起きるのである。それは、多義的にして（完全にはコントロールされ得ない）空間で出来る。その空間を開けることができるのは、コマーシャルイズムの産物をその都度几帳面に（渾身の力で）自分なりに獲得⁶¹しようとする事によってであろう。ド・セルトーとフィスケは、ポピュラー・カルチャーの分裂活動的な精神とその固有の制約を、（バフチーン* 以来、近代フォーク・カルチャーの鍵と解されてきた）カーニヴァルの実際をモデルとしてスケッチした。それによって彼らは、誤った一義的理解あるいは単なる称揚を回避している。ポピュラー・カルチャーが解読のための文化テキストとして活用する商品は、止揚しようもなく両義的かつ多義的である。同じことは、ポピュラーな⁶² 解読・使用方法にもあてはまる。それらは、私たちの文化の切れ目と力学に貫かれている。（イデオロギー色の薄い英語の術語で言えば） „class“, „race“, „gender“ である。

58 John Fiske, *Understanding Popular Culture*. Boston 1989.

59 文化産業の材料がイノヴェイションとして改作されることをも調査されてはいるが、しかし、ポピュラー・カルチャーという反対地平（Gegenhorizont）においてではない。Paul Willis u.a., *Jugendstile. Zur Ästhetik der gemeinsamen Kultur*. Hamburg 1991.

60 これらの創造性の証左を、すでにペーター・リュールコプフが記録していた。参照、Peter Rührkorf, *Über das Volksvermögen. Exkurse in den literarischen Untergrund*. Reinbek 1967.

61 自分なりに獲得（eigensinnige Aneignung）の „Eigensinn“（すなわち合理的な抵抗と同じものではない）については次を参照、Alfred Lüdtke, *Eigen-Sinn. Fabrikalltag. Arbeitererfahrungen un Politik vom Kaiserrich bis in den Faschismus*. Hamburg 1993.

62 筆者のこの言葉の使い方は発見法的（heuristisch）である点において、ド・セルトーやフィスケの先行例が理念系を構成するのとは相違する。ポピュラーなもの（das Populare）は、多分に恣意的な文化的構成体であろう。しかし所与の歴史的な時点にあつては、何が正統的文化の観点から見て（すなわち通常のセンスとライフスタイルに属することによって）ポピュラーであるのかを再構成することができる。

とは言え、ポピュラー・エンタテインメントのすべてがポピュラー・カルチャーの独自の生産性を繰り広げさせ得る文化テキストとして現れるわけではない。それが発現するのは、公的な思念から（審美的・政治的・道徳的に）撥ねつけられるような勇み足においてである。それを通じて、悲痛で困惑を誘うスキャンダラスなものへの喜びが嘸みしめられる。イデオロギー的・原理的に抑圧された存在が、抑圧する力との間で、予想外にコントロールし得ない衝突をきたすことへの喜びである。

ドイツでは、屢々、土曜の午後のテレビ番組からゴシップ新聞の月曜日の大見出しに至るまでのいわゆるセンスの欠如が指弾される。はじめに引用したライヒ＝ラニツキのコラムには、写真が付いている。人気のある若手のテレビ司会者2人が数百万人の視聴者の前で腕立て伏せをしているのである。フランケンフェルト* やクーレンカムプフ* の場合なら、そうした出で立ちを考えられなかったであろう。要するに、まっとうで規律ある身体という尺度に異を唱えているのである。彼は、逆立ちで登場することで、〈下から〉の力によるコントロールを示そうとしたのである。トミー・ゴットシャルクが^{へま}をして頭を腰の辺りまでもってきたりすると、ライヒ＝ラニツキが、彼に、決してセンスがないわけではない、と保証するのである。〈賭けようじゃないか……〉は、もはやポピュラー・カルチャーを解発するには役立たない。センスの判定人が、〈通俗的な〉身体語という聖痕をあきらめているとき、支配秩序へのシンボリックな距離は成り立ちようがない。弱者や抑圧された者が、変わった出で立ちという（それはそれで正統的な）意味の拒否によってアイデンティティが確かめるような空間は、もはやあり得ないのである。

ポピュラー・エンタテインメントが角を立てるがごとき資質を失った今、ポピュラー・カルチャーは、拒否やパロディーや俗っぽさやセンス破壊を楽しむ上で、これまでとは違ったテキストをもとめることになるかと推測される。文化産業は、食傷気味あるいは白けてしまった公衆のために常に新しい刺激を模索している、また実際に再三決定的な商品を提供している。ポピュラー・カルチャーが独自の満足を見出すような限界を超え出るプレイが、プロデューサーにはお手の物となってしまうている。そこでは他ならぬ競争相手が比類ない師匠なのである。

爆発と奪取の新たな螺旋運動のメカニズム、すなわち挑発、商品開発、調整、とりまとめ、これらが、大衆藝能の運動形態として繰り返し指摘されてきた。その最もめざましいのは、ジャズやポップスやロック・ミュージックである。文化商品の生産と、受容側の感性の形成とのあいだに相互交流があることは言うまでもない。その相互交流とはまた刺激のインフレーションの場所でもある。しかしまた、分かり切った物を出し抜こうとする志向のなかには、（ポピュラー・カルチャーに必要とされる反抗の要素として）挑発と際どさという特質を取り戻そうとする試みも含まれる。ヘヴィー・メタル・ロックから先祖返りじみた

ホラー・ショーや悪魔的な演出を経て、瀕死の人間が喉を鳴らすような<ノイズ・コア>における嬌声までが、その例証でもある⁶³。

1990年代のトレンド：骨の髄までノンセンス？*

1990年代に入ってドイツ連邦共和国は新たな形成に向かうなかで、戦後デモクラシーが幾らか冷え込み、政党の混迷が指摘されているが、これは婉曲な言い方で、実際にはかなり根源的な危機でもある。自分たちの利害や問題や不安が政治システムに真剣にとり上げられているとも、正当に議論されているとも感じない人々が増える一方である。失業や貧困、それに住宅を失うなどの困窮が、またところによっては地域全体の工業の崩壊とも重なり、さらに統一の代価や環境危機や北と南の豊かさの落差のために従来 of 生活水準が維持できなくなったとの不安も重なる。かくして不安定と攻撃性の強烈な混合が出来る。

社会の低落、一向に止まない排除、立たない見通し、大衆の気分これらが強まり、また労働社会のモラル座標が綻びをきたし、さらに民衆の代表者たちが自己利害に汲々とするところでは、ポピュラー・カルチャーに活力を付与する文化的文脈への希求が起きる。極限までセンスを無くす — 正統的な文化の観点からはこう言うほかないもののなかで、ドイツ統一の犠牲者・敗残者・排除された者たちがアイデンティティをもとめるのである。<骨の髄までノンセンス> のための材料とは、合理的な生き方・活動指針、ディシプリンと自己統御、作法・調和のとれた家政生活、進歩・社会的責務、これらをめぐる議論を文字通り<身体から遠ざける> ためのものでもある⁶⁴。

<骨の髄までノンセンス> — この言い方で筆者が想定するのは、ポピュラー・エンタテインメントの2つ傾向である。一つのタイプは、日常に近い技術が高められ、その脅迫的・破壊的な契機が独立して力をカリカチュアに変えることである。それによって、規律に即し合理的でもあると自称するテクノ文明にひそむ不安と神話性も付き放せるようになり、楽しめるようになる。巨大なタイヤの化け物のようなトラックが一ダースもの乗用車を押しつぶしたり、スーパートラックが競争したり、何千馬力で環境破壊をもものともせずモ

63 概観をあたえてくれる文献としては次を参照, Peter Kemper, *Immer aggressiverer Flirt mit dem Grauen*. In: FAZ, 14. November 1992, S.29.

64 当然にも、これらの基準は、力を持たない者や排除された者のあいだにも根を下ろしている。彼らは、個性が進む責任負担に直面して、<自分を超越る> 視点から、自己認識のチャンスを模索している。同時に、正統的な文化の価値は、<よき社会> の中心部においてもなお挑戦される。これをドラスティックに言い表せば、こうなるだろう — 新刊書のめざましい広告において、“小児性交者 (Babyficker)” のタイトルの下で、文学としては意味のないテキストが第二席を獲得するようなところでは、その次に<チェーンソーによる大量殺人> がテレビの画面に現れても少しもおかしくない。

ンスターじみた車輛が〈トラクターを牽引〉する⁶⁵といったものである。ここでは、競争と自己破壊が一つのものへと捻じ曲げられて、しかも分かりやすくなっている。何十万人もの視聴者に向けて⁶⁶、男らしさの意味合いで、力による自然制御が強調される。しかもその種類の44篇のビデオ・フィルムを提供したのは、偶然引き受けたドイツのある一社で、„Car Wars“, „ブリキのラブソディー“, „Car Crashes/死の危険がついてまわる“などのタイトルの下に、乗用車とスクーターの玉突き衝突が並べ立てられる⁶⁷。これは、家庭でのテレビ視聴におけるスポーツ番組でも同じことである。そうしたエンタテイメントを楽しむ人々は、公の視聴者としてほとんど姿を現さない。それには、科学技術の魅力が誇張して扱われることによって、一般通念でもある合理性のモデルに疑問を突きつけることに自分が巻き込まれる恐れからであろう。

時に、〈骨の髄までノンセンス〉な演出は、また別のヴァリエーションにもなっている。残酷で際どくて、嫌悪を誘う、モラルに反した身体表現である。ここでも家庭でのテレビ視聴が先行している。アメリカ発の〈レスリング〉は、今日ではテレビ番組にはすっかり定着した。それだけでなく、プロレスのスターに熱狂する雑誌は、ドイツ語だけでも8種類⁶⁸を数える（一年前にはようやく4誌であった）。のみならず、商業的な〈プロレス巡業〉がドイツ全土をめぐるまでになっているのが昨今の状況である。生真面目なスポーツ・コメンテーターの見方からすれば、そこで男たちが繰り広げるのは、〈まるで野獣であり、しかもセンセーションを飢えた公衆を喜ばせるため、互いに手足をねじ曲げたり、首を絞めたり、トラムポリンのように相手の身体の上で跳ねるのである〉。その振る舞いたるや、〈吐き気を催すほどで、……正視に耐え得ない〉ばかりか、〈まるで闘犬であり、よだれを垂らし、口から泡を吹き、汗に滴らせながら観衆の前で、いやが上にも威嚇の格好をし、その上リングでは、筋肉をこれ見よがしに互いに披露したかと思うと、相手がマッ

65 ここでは、最強のトレーラーまでも最後には気絶しながらグロッキーになるというウィットが入っている。

66 ニュルブルクリング (Nürburgring [訳者補記] ニュルブルクRPに1927年に開設された伝統のあるサーキットで F1GPなどの会場) での1992年全欧トラック・レース・チャンピオンでは、17万人の観客が集まった (Truck Treff 5/1992, S.30). 参照, Claus Perrig, *Trucker – Lastwagenfahrer. Mythos und Realität einer gruppengeprägten Berufskultur*. In: Andreas Kuntz (Hrsg.), *Arbeiterkulturen. Vorbei das Elend – aus der Traum?* Düsseldorf 1993, S.227–230.

67 「メディア郵配ショップ」社 (Firma „Medien Post Shop“) の1993年第1期のカタログには、これ以外にトラクター牽引、モンスター・トラック (Monster Trucks), トラック競争を扱った22篇のビデオ・フィルムが掲載されている。

68 „WWF-Magazin“, „WWF Extra“, „TV Wrestling“, „Catch Magazin“, „Wrestling Mania“, „Wrestling Superstars“, „Top Wrestlers“, „TV Wrestling Gigants“ (1993年秋の時点での売店/スタンドの状況による)。

トに倒れると、文字通り敵を叩きのめすために自分も折り重なる>⁶⁹。

この <叩きのめす> (Plattmachen) という言い方について連想するのは、ボンの経済政策の赴くところ、旧東ドイツでは多くの該当者がこの言葉を遣っていたことである。両観念の結びつきはある種の経験の集約という面があり、それとの重なりで <レスリング> の魅力もまた両義的と感得されるのであろう。因みに、フィスケは、この種のエンタテインメントをフォーク・カルチャー、とりわけバフチーンが明らかにした <グロテスクな身体> の文化に位置づけている。ちやほやされた高技能スポーツの身体的理想をパロディーに仕立て、それどころかCMにも登場する成功者をパロディにするのは挑発的な仕業であろう。またそれ以上に挑発的なのは、<スポーツ精神> や <フェアプレイ> の規則に敬意を払わないのは、いっそう挑発的でもある。

身体は、フォーク・カルチャーの伝統的な媒体であった。とりわけ、下位に位置づけられ、また抑圧された集団の経験を際立たせる媒体であった。<敗北者> である彼らは、<勝者> から尊敬されることになる何物もそなえていない。しかしまた、彼らは成功した富裕者を讃仰するべきであるとも感じていない。彼らは、決して <善良な敗北者> ではない。なぜなら、社会は、彼らにたいして、イデオロギーが主張するようなチャンスを与えなかったからである。<美> とは支配する側のメタファーであるとすれば、醜が被支配者の独自性と反抗性のシンボルとなる他ない。<グロテスクな身体> は二つのことがらを表現している：抑圧されるものであること、そして抑圧が不可能であること — カーニヴァル・ショーはそうした爆発がゆるされる場所である>⁷⁰。

レスリング興業の演出⁷¹ は、ノンセンスにして規準破壊のポピュラー・カルチャーという貯蔵庫から小道具を取り出しただけではない。それはまた、<敗北者> の現在経験にも向けた演出でもある。演者は <Repo Man> すなわちアメリカの残忍な債権回収者として登場する。そのトレードマークは、借金の形にはいった乗用車をひっぱるロープウィンチである。

骨の髄までノンセンス — これは、刺青がアクチュアルなブームとなっていることにも

69 „Natürliche Disaster“. In: FAZ, 29. September 1992.

70 J. Fiske, (58), S.100. 参照, また概括的には同書の次の章 „Offensive Bodies and Carnival Pleasures“ (p.69-102).

71 参照, Gerhard Sonnert, *Berufsringen – eine neue Arene für die Reproduktion politischer und kultureller Werte*. In: Cord Jakobeit, Ute Sacksofsky, Peter Welzel (Hrsg.), *Die USA am Beginn der neunziger Jahre*. Opladen 1993, S.77-93.; Georg Seeflen, *Barbaren, Daddies, Clowns*. In: Konkret, 1 (1993), S.62-64.; ゾンネルトが、比重の重いキャッチャーを軽い筆さばきで <啓蒙の弁証法> と <生活世界の植民地化> といった概念世界に押し込んでしまうが、それによって、ここでもまたディスクールを通じた剥奪が仄見える。

言い得よう。〈極限まで〉、これは、美しからざる身体が藝術作品として呈示される痛切な変容を指すだけではない。皮膚を刺して痛める逸脱にも進まないわけにはゆかない。二の腕に彫りものをほどこすことは、壁に沿って穴を掘る感覚にも匹敵する、とは刺青師の言である。身体の他の部分は、もっと痛い。それに坐っているのもずっと長くかかる。とまれ、その代わりに、市民とは違った何ものかになる。ある顧客は、誇らしげにこうコメントする。〈他の人たちは、壁に絵を懸けるが、俺は腹にかけるんだ〉⁷²。

ホラー・ビデオや暴力ビデオが相変わらず氾濫していることも、それに劇場映画には暴力と破壊が度を過ぎる傾向にあるのも、〈骨の髄までノンセンス〉と無関係ではない。むしろこの対象において、ポピュラー・エンタテインメントの文脈の複合性と多義性が明らかになる。同時に、一点の説明によって無害にしてしまう危険性もそうである。しかし、センスの境界のずれへの反応や、おなじくアクション性と残酷描写を受け入れることへの反応を正統的なライフスタイルの約束事のなかに見ることを、(歴史的に具体的かつ多様な分析に立つ以上)、筆者はあきらめることができない。その視点は、他の説明(たとえば文化マーケットの刺激・必要性の螺旋運動から、あるいは文明理論から)とは矛盾するものでもない。

センスの面から排除のシンボリックなプレイ、また社会的〈敗北者〉のアイデンティティと自己認識にとってのその意味、これらを指摘するとしても、それは暴力と人間差別の局面にもポジティブな面があることを求めているのではない。抑圧された者たちの正当な文化をいささかでも軽視するのでもない。〈極限までノンセンス〉とは、この脈絡では、シミュレーションの境界が、たちまち踏み超えられてしまうことを言わんがためでもある⁷³。

〈嘔吐するような〉エンタテインメントとその消費者たちへの忌避を問題にするとすれば、ポピュラー・カルチャー理論の特に理論的な進展に注意を喚起するのが適切と思われた。しかしそれまた批判的に発展させる必要がある。素朴な人々のずる賢さと創造力を探し求めても、却って視野をせばめるだけである。(文化産業から常に自分の空間をかすめ取ろうとする) 不屈にして意味論的なゲリラというイメージには、一種ロマンティシズムがひそんでいる。特に、ポピュラー・カルチャーの彼方に支配者たちの文化の一片を見るの

72 Frankfurter Rundschau, 31 Oktober 1992, Lokal-Rundschau Wetteraukreis. 因みに雑誌 „Tattoo“ や „Tattoo Motiv“ によれば、刺青をほどこす身体は男性の占有ではない。またプロレスの場合も、女性リーグの作る動きがみられる。— なおこの小論を書き終えた後に刊行された文献が、より経験的を踏まえて限定的である。Matthias Friederich, *Tätowierungen in Deutschland. Eine Kulturosoziologische Untersuchung in der Gegenwart*. Würzburg 1993.

73 参照, Jan-Uwe Rogge, *Theorien zur Wirkung medial inszenierter Gewalt. An Fallstudien (nochmals) überdacht*. In: *Puzzle – Zeitschrift für Friedenspädagogik*, 2 (1993) 4, S.2-11,

は短絡に過ぎるであろう。社会的な特権者たちもまた、イノベーション志向をそなえ、<ずる賢い> ののである。教養という資本を携えて屹立する社会的な勝者たちが意図するのは、彼らの再生産要件に照応する余暇を、正統的で特権所得を約束してくれるライフスタイルとみなすことある。彼らもまた、(比喩的に言えば) 目端のきいた啓蒙家や、立ち回りのうまい突撃隊を、ポピュラー・エンタテインメントの目下の戦場に送りこんできた。そして彼らなりに、ポピュラー・エンタテインメントの諸要素を解説し、反因襲性や弛緩や緊張や経験密度が按配されたスタイルの脈絡のなかに組み込むのである。

共通のエンタテインメントが分離を助長する？

ポピュラー・エンタテインメントをめぐる関係の変遷から生じる幾つかの問題を追ってみた。その際、筆者にとって重要なのは、ライフスタイルの複数性を前に悦に入ったり、文化の平板化にメディア受けのする驚きをみせるのではとらえ切れないある種の局面である。ポピュラーなお楽しみの非正統的と括りだされるような諸領域は、19世紀の最後の三分の一以来、社会的・文化的に締め出された者たちの独自空間として形づくられていった。それらの諸領域は、排除のなかにあつてアイデンティティの興奮剤さながらに作用した。かつての<低俗>・<俗っぽい>・<ノンセンス>と評されたエンタテインメントが余暇の営為に取り入れられ、さらにアカデミックな教養層のライフスタイル・ディスクール形成にも取り入れられたことによって、文化空間のトポグラフィーは深甚な変化をきたした。理論的には、二種の反応が考えられよう。先ず、上昇を志向する者たちや編入の意志をもつ者たちは、(正統な支配的な価値の地平のなかで) 文化的に自己を認識し、行動能力を獲得するチャンスをもつであろう。他方、<敗北者>は、アンチ美学の媒体のなかで(煽るような骨の髄までノンセンスを手立てとして) ネガティブなアイデンティティを約束してくれるエンタテインメント商品を探しもとめられると思われる。ここで、<果てしなきゲーム>* というパースペクティブがくつきりと現れる。

二種の趨勢がどのように展開するかを決定づけるのは、必ずしもポピュラー・エンタテインメントの野においてではないかも知れない。しかし、ノンセンスの文化に走る社会的論理をよりよく理解するなら、<ライブ社会>のなかでも教養層のエスノセントリズムを再生産している誤った先入観を無くすことには役立つだろう。

マス・カルチャーとエンタテインメント産業には、有意義なデモクラシー潜在力が含まれている。それらは、共同社会のすべての成員が分かちもつイマジネーションの貯蔵庫でもある。現今の動きは、共通のエンタテインメントによって却って集団が区分されるような社会に向かっているところがある。最後に、有益と筆者に思えるのは、エンタテインメントが

啓蒙の理解のなかで持った意味を思い起こすことである。18世紀後半にこのエンタテインメント (Unterhaltung) の語が飛び交ったとき、〈息抜き〉 (Kurzweil) や〈たのしみ〉 (Ergötzen) といった古い内容と、〈会話を交わす〉 (Austausch im Gespräch) という新たな意味との間で緊張が生まれた。そのなかで、〈下支え/たのしむ/おしゃべりする〉 (Unterhalt) が〈人生を得る〉 (das Leben erhalten) という方向で基本的な意味を獲得したのである⁷⁴。

訳注

- p.107 トーマス・ゴットシャルク (Thomas Gottschalk born 1950 in Bamberg) : バンベルク出身のエンタテイナー, Tommyは愛称。
- p.107 マルセル・ライヒ＝ラニツキ (Marcel Reich-Ranicki born 1920 in Wloclawek/ポ) : ドイツの代表的な高級紙『フランクフルト・アルゲマイネ新聞』の文化欄を長く担当したオピニオン・リーダー。
- p.107 ナータン (Nathan) : ドイツの啓蒙主義の作家・思想家レッシング (Gotthold Ephraim Lessing 1729-81) の劇作品『賢者ナータン』 (Nathan der Weise, 1779) の主人公。ユダヤ教, キリスト教, イスラームの3宗教の優劣論が無意味であることが本物と偽物の見わけのつかない3つの指輪に喩えられる。
- p.107 ファウスト (Faust) : 民間の伝承や緑日の演劇として16世紀頃から知られてきた, 欲望の達成のために悪魔と契約する魔術師。早くクリストファー・マーロウ (Christopher Marlowe 1564-93) が戯曲化し, やがてゲーテがこれを素材として一大思想劇を構想したことによって (原/初稿ファウスト 1775年, 第一部1808年, 第二部1833年), 一層知られるようになった。
- p.107 ハンス・アルベルス (Hans Albers 1891-1960 ㊦ Hamburg ㊧ Kempfenhausen bei Starnberg BY) : 俳優, 歌手, 映画監督。多方面の才能を發揮して人気のあった演劇人。ナチ時代にも活動を続けたが, ナチスへの協力には消極的であり, 私生活でユダヤ人の妻とは公式には離婚して亡命させ, 戦後は復縁するなど苦労を重ねた。
- p.107 エスカミーリョ (Escamillo) : ジュルジュ・ビゼーのオペラ『カルメン』に登場する闘牛士 (バリトン) で, ヒロインのカルメンをめぐるドン・ホセの恋敵。
- p.107 <ライヴ社会> (Erlebnisgesellschaft) : ゲルハルト・シュルツェ (Gerhard Schulze) が1992年に出版した主著のタイトルで, 流行語ともなった。本論も, その刺激の下で成り立った面がある。
- p.108 文化産業 (Kulturindustrie) : アドルノとホルクハイマーが1947年に刊行した『啓蒙の弁証法』によって用いた概念。
- p.110 ピエール・ブルデュー (Pierre Bourdieu 1930-2002) : フランスの社会学者, 階級・階層と教育の相関を調査し, 社会構造が再生産される仕組みを解明するための理論を提示した。
- p.111 ホセ・オルテガ・イ・ガセト (José Ortega y Gasset 1883-1955) : スペインの哲学者。主著に『ド

74 参照, Hans Robert Jauf, *Das kritische Potenzial ästhetischer Bildung*. In: Jörn Rüsen, Eberhard Lämmert, Peter Glotz (Hrsg.), *Die Zukunft der Aufklärung*. Frankfurt am Main 1988, S.221-232, hier S.225.

マーゼ 「ポピュラー・エンタテインメント — <大衆文化> から<ライブ社会>へ」

ン・キホーテをめぐる思索』(Meditaciones del Quijote, 1914), 『大衆の反逆』(La rebelión de las masas, 1929) などがある。

p.114 ディーター・クレッサン (Dieter Claessens 1921-97 ㊦㊧ ベルリン)：ドイツの社会学者・文化人類学者。ベルリン自由大学で学位を得た後、ミュンスター大学のヘルムート・シエルスキーの下で助手となり、また教授資格を得た。ミュンスター大学教授。若者の集団形成についても論じた。

p.114 ピュロスの勝利 (Pyrrhussieg)：ピュロス (BC319-272) は古代ギリシアのエペイロス (Epilus) の王で、しばしばローマ軍を破ったが、味方の死傷者も多かった。転じて、犠牲の大きすぎる勝利を言う。

p.115 『カサブランカ』(Casablanca)：1942年製作のアメリカ映画。マイケル・カーティス (Michael Curtiz/ハンガリー名ケルテース・ミハーイ Kertész Mihály 1888-1962) 監督作品、ハンフリー・ボガート (Humphrey Bogart) とイングリッド・バーグマン (Ingrid Bergman) の好演で知られる。

p.115 『ウエスタン』(Spiel mir das Lied vom Tod : 原題 : C'era una volta il West, 英題 : Once Upon a Time in the West)：1968年製作のイタリア・アメリカ合作映画。セルジオ・レオーネ監督作品。黄昏の西部開拓時代を舞台に、当時の人間模様を活写した大作群像劇である。レオーネの代表作であるのみならず、西部劇の金字塔として高く評価されている。この作品から『夕陽のギャングたち』、『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・アメリカ』までを、それまでの「ドル箱三部作」に対して「ワンス・アポン・ア・タイム三部作」と呼ぶこともある。

p.115 『羊たちの沈黙』(Das Schweigen der Lämmer)：アメリカの作家トマス・ハリス (Thomas Harris born 1940 in Jackson/Tennessee) の小説 (1988) で、異常性格者ハンニバル・レクターを登場させた一連の作品の一作。1990年に映画化され (Jonathan Demme 監督作品) アカデミー賞を受賞した。

p.116 クリント・イーストウッド・ジュニア (Clint Eastwood, 本名 : Clinton Eastwood, Jr. born 1930)：米・加州サンフランシスコ出身の俳優、映画監督、映画プロデューサー、作曲家、政治家。俳優として数多くの西部劇やアクション映画に出演し、トップスターの地位を確立した。監督としても『許されざる者』『ミリオンダラー・ベイビー』でアカデミー賞作品賞と監督賞を2度受賞した。

p.116 『ビーオの駅舎』(Bios Bahnhof)：テレビ番組のプロデューサー・司会者アルフレート・ビーオレーク (Alfred Bielek born 1934 in Fryštát/Freistadt 現Karviná/チェコ) が企画・司会したトーク&ヴァリエティ番組で、1978-82年間にケルン=フレッヒェン=ブレンツェルラート鉄道 (Köln-Frechen-Brenzelrather Eisenbahn/KFBE) の旧車庫からARD (ドイツ公共放送/第一チャンネル) で生中継された。この番組を通じて多くのタレントが生まれたことでも知られる。

p.116 ボリス・ベッカー (Boris Becker born 1967 in Leimen BW)：プロのテニス・プレーヤーとして1984年にプロ入りし、翌1985年にウィンブルドンで17歳7か月で最年少優勝を果たしたのを始め、2歳下のシュティ・グラフと共に西ドイツのテニスの黄金時代を築いた。

p.116 ローター・マテウス (Lothar Matthäus born 1961 in Erlangen BY)：ドイツのサッカー選手、1980、90年代に同国を代表する名手であった。気性が激しく、チームメート、審判、監督とのトラブルでたびたびマスコミの話題になった。ここで言われるのも、その最近の話題を知っているかどうかといった文脈である。

p.116 マカロニ・ウエスタン (Italo-Western)：イタリア映画の一ジャンルで西部劇をイタリアの風土に置き換えたもの。日本では<マカロニ・ウエスタン>と呼ばれた。

p.116 アルノルト・シェーンベルク (Arnold Schönberg 1874-1951)：オーストリアの作曲家で、無調音楽として15音技法を創始した。

- p.116 ローリング・ストーンズ (The Rolling Stones) : 1963年にレコード・デビューしたイギリスのロック・バンド。バンド名は、初代のリーダーであったブライアン・ジョーンズ (Louis Brian Hopkin Jones 1942-69) が崇拜するアメリカのブルース・シンガーでギタリストのマディ・ウォターズの作品に因んで名づけた。
- p.116 <破落戸たち> (Prols) : „Prol“ は、粗野・無嗜好・無教養な人間を排斥の意味を籠めて指す „Proleten“ を縮めたスラング。プロレタリアートとも同根。語感は、破落戸 (ごろつき) の漢字表現に近い。
- p.116 <電圧型> (Spannungsschema) : 緊張型 (シエーマ) と訳してもよいが、ここでは原意を活かして便宜的にこう訳しておく。
- p.118 ニール・ポストマン (Neil Postman 1931-2003 ㊦㊧ ニューヨーク) : アメリカのメディア理論家、批評家。テレビ文化の理論家であり、ニューヨーク大学教授としてコミュニケーション学を担当した。特にオーウェル賞を受けた『死ぬほど楽しむ』 (*Amusing Ourselves to Death*, 1985) はよく知られ、タイトルが流行語ともなった。カッサンドラーは叙事詩『イーリアス』に歌われたトロヤの王女で、アポロンから予言能力を授かるが誰にも信じられないことを運命づけられた。トロヤの陥落後はアガメムノンの戦利品となったが、ミュケネイでアガメムノンと共にその妻クリュタイムネーストラに殺された。
- p.119 レイモンド・ウィリアムズ (Raymond Williams 1921-88) : イギリスの思想家・小説家、イギリス共産党員。ケンブリッジ大学教授。マルクス主義の立場に立ち、特に著作『文化と社会』 (*Culture and Society*, 1958) と『長い革命』 (*The Long Revolution*, 1961) がよく知られる。
- p.119 政治的な生物 (Zoon Politikon) : アリトテレスによる人間の定義として知られる。ギリシア語では „ζῷον πολιτικόν“ で、<社会的動物>とも訳される。
- p.121 ニクラス・ルーマン (Niklas Luhmann 1927-98 ㊦ Lüneburg NI ㊧ Oerlinghausen NW) : 社会学者。ビーレフェルト大学教授。アメリカでタルコット・パーソンズに就いたが、やがて社会構成を個体よりも生命体原理 (オートポイエーシス概念) によって理解するようになった。特に主著『社会システム理論』 (*Soziale Systeme*, 1984) がよく知られる。
- p.121 エルヴィーン・アンダードッグ (Erwin Underdog) : アンダードッグは敗残者・社会的不正の犠牲者を意味する英語だが、ここではそれを登場人物名とする新聞のコラムが話題になっている。エルヴィーンの古意は<友>であり、敗残のわが友といった意味になる。
- p.122 <追剥たちの文化> (Freibeuterkultur) : 原語を直訳した。
- p.125 仕来りと習俗 (Sitte und Brauch) : 民俗学の対象を名指すために伝統的使われてきた言い方。
- p.125 ヴァルター・ベンヤミン (Walter Bendix Schönflies Benjamin 1892-1940 ㊦ ベルリン ㊧ Portbou/ピレネー山中で自殺) : 思想家・文藝批評家・社会学者。無意識の記憶の原語は „memoire involontaire“。
- p.125 ウムベルト・エーコ (Umbert Eco born 1932 in Alessandria, Piemont) : イタリアの哲学者、記号論を得意とする。小説『薔薇の名前』 (*Il nome della rosa*, 1980) も有名である。(注8) で言及される。
- p.125 ミハイール・バフチーン (Bachtin : Михаил Михайлович Бахтин 1895-1975) : ソビエト時代のロシアの思想家・文藝理論家。ここでの文脈では主著の一つでもある『フランソワ・ラブレールの作品と中世・ルネサンスの民衆文化』 (Moscow 1965 執筆は1940, 邦訳 : 川端香男里 [訳] 1974) を踏まえている。
- p.126 ペーター・フランケンフェルト (Peter Frankenfeld 1913-79 ㊦ Lichtenberg bei Berlin ㊧ ハム

マーゼ 「ポピュラー・エンタテインメント — <大衆文化> から <ライブ社会> へ」

ブルク)：俳優，歌手，また司会者・エンタテイナーとしてラジオの娯楽番組に大きな足跡を残した。

p.126 ハンス=ヨアヒム・クーレンカムプフ (Hans-Joachim Kulenkampff 1921-98 ㊦ ブレーメン ㊧ Seeham/境ザルツブルク州)：俳優，テレビの司会者，特にクイズ番組の司会者として人気を博した。

p.127 <骨の髄までノンセンス>(Geschmacklosigkeit bis zur Schmerzgrenze)：一種のキーワードとして繰り返されるので，原文を挙げておく。

p.131 果てしなきゲーム (プレイ) (Spiel ohne Grenzen)：本論の枕ともなっているトーマス・ゴットシャルクが司会をつとめた人気テレビ番組のタイトルである。原題はこれが掲げられているが，訳出にあたっては，サブタイトルを掲げた。これには „Spiel“ (英 play) が，一般的な語でありながら，ゲームでも遊びでも意味が限定されてしまい，適切に訳するのが困難であることも理由である。番組の意味からは，<どこまでも楽しもう>とでもなるであろう。